



東京上野本店 (The シカゴビル)

OPEN: 12:00~19:30 年中無休 (年末年始を除く)
〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7
TEL. 03-5818-1123 FAX. 03-5818-1124
E-mail: chicago@regimentals.jp



シカゴブログ連載中!! <http://regimentals.jugem.jp>
モバイルブログは右のQRコードからアクセスして下さい。

東京上野本店一階に古式銃専門店 The Chicago Gallery もございます。



大阪店 (武蔵一丁目ビル 4階)

OPEN: 12:00~20:00 年中無休 (年末年始を除く)
〒541-0049 大阪市中央区瓦町1-5-14
TEL. 06-6223-9070 FAX. 06-6223-9071

www.regimentals.jp

弊社独自開発のスマートフォンに搭載の製品情報や新作情報は、会員登録後専用シカゴレジメンタルズに紐着します。
私的かつ商業目的での使用は出来ません。そのほかにも会員登録後、弊社主催のシカゴレジメンタルズが開催する
各種イベント、展示、出版物等、様々な特典やサービスをご用意しております。会員登録のうえは必ずご登録ください。より詳しくは下記をご覧ください。

Copyright © Chicago Regimentals Co., Ltd. All Rights Reserved.

定価 300円 (税込)

Gazette Vol.21

The Annual Booklet for Deactivated Weapons and
Antique Firearms Collectors



U.S. Lever-Action Repeating Firearms

New Haven Arms Henry Model 1860 Rifle
Winchester Model 1866 Yellow Boy Rifle
S&W Volcanic No.2 Pistol
New Haven Arms Volcanic No.2 Pistol

Chicago *Regimentals* Co., Ltd.

株式会社 シカゴレジメンタルズ

Deactivated Weapons, Repeating Firearms, Antiques, and Collectibles

Table of Contents - 目次

Type 96 Light Machinegun	Page 03	ZB26 Light Machinegun	Page 56
Mosin Nagant M1891 Infantry Rifle by Remington	Page 04	Vz.52/57 Light Machinegun	Page 57
M1 Carbine	Page 05	Skorpion CZ918 Sub Machinegun	Page 58
M14E2 Rifle	Page 06	Yugoslav ZB30J Light Machinegun	Page 59
Colt AR-15 A2 Sporter II Carbine	Page 07	Zastava M76 Sniper Rifle	Page 60
Kel-Tec RDB Defender Self-loading Rifle	Page 08	P84 Sub Machinegun	Page 61
Browning Cal. .30 M1917A1 Heavy Machinegun	Page 09	Israeli FAL Self-loading Rifle, Late Type	Page 62
Browning Cal. .30 M1919A6 Light Machinegun	Page 10	Gali SAR Assault Rifle	Page 63
Stevens Model 320 Shotgun	Page 11	Negev Light Machinegun	Page 64
MP43 Assault Rifle	Page 12	Congolese FN FAL Self-loading Rifle	Page 65
HK SL8-1 Self-loading Rifle	Page 13	Vektor R5 Assault Rifle	Page 66
Walther MPK Sub Machinegun	Page 14	Mukden Type 13 Infantry Rifle	Page 67
LEI M4A1 Suppressed Carbine	Page 15	Norinco 84S-2 Self-loading Rifle	Page 68
LEI M4A1 9mm Carbine	Page 16	Norinco Type 56-2 Assault Rifle	Page 69
Manroy ME16X4 Rifle	Page 17	KPV Heavy Machinegun	Page 70
Manroy ME4X1 Carbine	Page 18	Japanese Matchlock Cavalry Pistol	Page 71
Development of Bren	Page 19-20	U.S. Model 1836 Flintlock Pistol	Page 72
Bren Mk I Light Machinegun	Page 21	U.S. Colt Model 1848 Dragon Revolver	Page 73
Bren Mk II Light Machinegun	Page 22	U.S. Robbins & Lawrence Pepperbox	Page 74
Bren Mk B/I Light Machinegun	Page 23	U.S. Smith & Wesson Volcanic No.2 Pistol	Page 75
Bren Mk III Light Machinegun	Page 24	U.S. New Haven Arms Volcanic No.2 Pistol	Page 76
Bren L4A3 Light Machinegun	Page 25	U.S. Starr Model 1858 Army Revolver	Page 77
Lewis M1914 Light Machinegun	Page 26	U.S. Colt Model 1860 Army Revolver	Page 78
Vickers-Berthier Mk I Light Machinegun	Page 27	U.S. Savage Model 1861 Navy Revolver	Page 79
Vickers Class K(G.O. No.1 Mk I) Machinegun	Page 28	U.S. Whitney Navy Revolver, 2nd Model	Page 80
BSA .303 Browning Machine Gun Mk II*	Page 29	U.S. Remington-Rider Double Action Belt Revolver	Page 81
Besa Mk III* Tank Machinegun	Page 30	U.S. Rogers & Spencer Army Model Revolver	Page 82
Revelli-Beretta M1915 Self-loading Carbine	Page 31	U.S. Colt Model 1855 Revolving Shotgun	Page 83
Beretta M12S Sub Machinegun	Page 32	U.S. New Haven Arms Henry Model 1860 Rifle	Page 84
Breda 5C Medium Machinegun	Page 33	U.S. Spencer Model 1865 Carbine	Page 85
Breda 5G Light Machinegun	Page 34	U.S. Remington Percussion Revolving Rifle	Page 86
Breda M1930 Light Machinegun	Page 35	Prussian Dreyse M1850 Needle-fire Revolver	Page 87
Breda Bren Light Machinegun	Page 36	Prussian Dreyse M1862 Infantry Rifle	Page 88
FR-P2 Sniper Rie	Page 37	English Percussion Pocket Pistols by Collins	Page 89
AAT-52 General Purpose Machinegun	Page 38	English 19-shot Bar Hammer Pepperbox	Page 90
Steyr AUG Variations	Page 39-40	English Deane, Adams & Deane Model 1851 Navy Revolver	Page 91
Steyr AUG A1 Carbine	Page 41	English 6-shot Pinfire Fist Pistol	Page 92
Steyr AUG A3 Assault Rifle	Page 42	Irish Percussion Duelling Pistol by Fowler	Page 93
Steyr AUG A3 Carbine	Page 43	French LeMat Revolver, 2nd Model	Page 94
Steyr AUG Z A3 Jagdkommando Carbine	Page 44	French No.6s 10-shot Pocket Turret Revolver	Page 95
Steyr-Solothurn S1-100 Sub Machinegun	Page 45	French Chassepot M1866 Infantry Rifle, 1st Model	Page 96
SIG MKPS Sub Machinegun	Page 46	Belgian Victor Collette Gravity Feeding Pistol	Page 97
Furrer MP41/44 Sub Machinegun	Page 47	Belgian Lefauchaux 30-shot Pinfire Revolver	Page 98
FN M1949 (AFN49) Self-loading Rifle	Page 48	Belgian Lefauchaux Presentation Model Revolver	Page 99
FN P90 Tactical LV Personal Defense Weapon	Page 49	Belgian Lefauchaux Revolver w/ Folding Knife	Page 100
Finnish Mosin Nagant M27 Rifle	Page 50	Event Information	Page 101-102
Mosin Nagant M1891/30 Sniper Rifle	Page 51	無可動実銃の買取り/下取りのご案内	Page 103
Simonov SKS Carbine	Page 52	無可動実銃の買取り/下取り保証	Page 104
B-10 Recoilless Rifle	Page 53	古式銃の買取り、下取りについての流れ	Page 105
ZB39 Light Machinegun	Page 54	Gazette Bookmark	Page 106
AR-M1 Assault Rifle	Page 55	無可動実銃/古式銃について	Page 107
		ご来店/通信販売をご利用のお客様へ	Page 108

Type 96 Light Machinegun

Mosin Nagant M1891 Infantry Rifle mfd. by Remington



Type 96
Light Machinegun
九六式軽機関銃



全長 1,174mm
口径 6.5mm×50
装弾数 30発

中国大陸での砂塵による影響や機構上の問題から故障が多発した十一年式軽機関銃に代わり、日本陸軍の主力軽機関銃として皇紀2596年(昭和11年)に制式となった軽機関銃です。ガス圧利用式の信頼性の高い軽機関銃で、陸軍のみならず海軍陸戦隊や満洲国軍にも広く配備されました。口径を拡大した九九式軽機関銃が後継として制式化された後も、主に中国戦線で終戦まで使用され、その後の国共内戦でも使用されました。本銃は外見こそZB26に類似していますが、内部機構が異なっている他、着剣装置や銃身内のクローム・メッキ、螺旋状の銃身放熱フィンなど独自の特徴も備えています。九六式軽機関銃は、昭和18年に生産を終えるまでに約41,000挺が生産されました。



本体上部には2.5倍の照準距離の取り付けが可能となっています。



Mosin Nagant M1891
Infantry Rifle
mfd. by Remington
モシンナガン M1891
歩兵銃(レミントン製)



全長 1,303mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 5発

第一次世界大戦中に米国のレミントンUMC社で製造されたモシンナガン M1891 歩兵銃です。大戦により小銃不足が深刻化した帝政ロシアは、米国に対してM1891小銃の発注を行い、1915年から1917年にかけてレミントン社及びウェスティングハウス社で生産が行われました。1917年にロシア革命が起こると、ロシア政府は資金難から発注契約を破棄し、既に受領していた小銃についても代金支払いを拒否しました。米国政府はメーカーを救済する為、代金未払いの小銃の買い上げや追加発注を行い、それらの小銃を主に訓練用として州兵や民兵組織等に支給しました。大戦終結後、米国は約77,000挺のM1891小銃をチェコスロバキアに譲渡し、一部はチェコ軍団により使用されました。



機身上部にはレミントン社のメーカー刻印や1917年製を示す刻印の他、帝政ロシアの双頭の鷹の国章が打刻されています。

写真はすべてすべて無断複製禁止です。

M1
CarbineM1 Carbine
M1 カービン

全長 905mm
口徑 7.62mm×33
(.30 Carbine)
装弾数 15/30発



1930年代後半に、米陸軍では拳銃や短機関銃の代替となる後方部隊向けの軽量小銃の開発を計画し、複数社が設計案を提出しましたが、最終的にウィンチェスター社の設計案がM1カービンとして採用されました。本銃は、ジョナサン・E・ブローニング設計のG30小銃を原型として、デイヴィッド・M・ウィリアムズが考案したショート・ストローク・ピストン式の高圧作動機構を取り入れて設計されました。使用弾薬はウィンチェスター社が同時期に開発した.30カービン弾で、小銃用弾薬としては低威力でしたが、当時の拳銃弾と比較すればはるかに長い射程を備えていました。M1カービンとその派生型は、第二次世界大戦中にウィンチェスター社を含む10社で生産が行われた結果、610万挺以上が生産されました。



本例は着剣装置のないフロント・バンドやハイ・ウッドタイプの銃床、フリップ式のリア・サイトを備えた前制生産型です。

M14E2
RifleM14E2 Rifle
M14E2 ライフル

全長 1,125mm
口徑 7.62mm×51
装弾数 20発



M14E2はM14ライフルを基に開発された分隊支援火器で、1963年に配備され、1966年にはM14A1のモデル名で再指定されました。連射時の反動を制御する為、ピストル・グリップ付の直銃床を備える他、銃床の前下部には折り畳み式の金属製フォア・グリップを備えています。さらに、着脱可能な二脚やマズル・スタビライザーが用意されていました。フル・オートマチック射撃時の安定性はM14から改善されたものの、重量が軽量である分、BARと比較すると依然として制師は難しいものでした。また、20連の箱型弾倉を使用する点や銃身過熱による連続射撃能力の不足といった問題も解決されておらず、分隊支援火器としては成功したとは言えないモデルとなりました。



ストックのバット・プレート部分にはゴム製のバッドが追加されています。

Colt AR-15 A2 Sporter II Carbine

Colt AR-15 A2 Sporter II Carbine
コルト AR-15 A2 スポーターII カービン



全長 889mm
(807mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



Kel-Tec RDB Defender Self-loading Rifle

Kel-Tec RDB Defender
Self-loading Rifle
Kel-Tec RDB ディフェンダー 自動小銃



全長 655mm
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



1985年から1987年にかけて製造されたコルト AR-15 A2 スポーターII カービンと呼ばれる民間向けモデルで、コルト社内でのモデル名はR6420です。銃身はA1タイプの細身の16インチ・バルルで、樹脂製の伸縮式ストックや着剣装置を備えています。ロー・レシーバー右側面は、マガジン・リリース・ボタンの周囲にフェンスのないスラプサイドと呼ばれるタイプで、レシーバーのピボット・ピンはスクリュー・タイプとなっています。R6420では生産時期によりボルト・フォワード・アシストやケース・デフレクターの有無、リア・サイトの仕様にバリエーションが存在し、本品はボルト・フォワード・アシスト、ケース・デフレクター、A1タイプのリア・サイトを備えた仕様です。



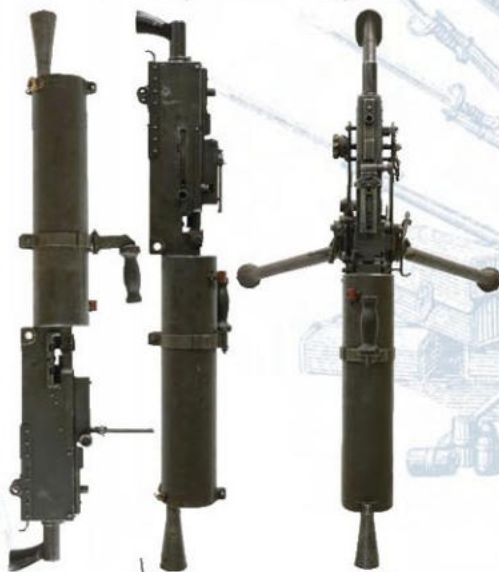
マガジンハウジング左側面には、コルト社のロゴに加えて、「AR-15 A2 CAL. 223 SPORTER II」のモデル名刻印が入っています。

Kel-Tec RDB(Rifle, Downward-ejection, Bulpup)は、フロリダ州のKel-Tec Industries社が製造するブルバップ方式の半自動小銃で、下方排莖機構やアンビ・セーフティ、左右交換可能なコッキング・ハンドル等により、完全なアンビ設計を実現しています。本体はモジュラー設計を採用し、銃身、レシーバー、ボルト、グリップの4つのアッセンブリーで構成されています。RDBシリーズのバリエーションとしては、標準モデルのRDB17、16インチの銃身と伸縮式ストックを備えたRDBディフェンダー、狩猟用ライフル風のグリップを採用したRDBハンター及びその短縮・軽量化型であるRDBサバハバル等が存在します。



RDBディフェンダーでは、M-LOK仕様のアルミニウム製ハンドガードに加えて、伸縮式のストックを備えています。

Browning Cal. .30 M1917A1 Heavy Machinegun



Browning Cal. .30 M1917A1
Heavy Machinegun
ブローニング .30口径 M1917A1
水冷式重機関銃



全長 985mm
口径 .30-06
装弾数 ベルト給弾

Browning Cal. .30 M1919A6 Light Machinegun



Browning
Cal. .30 M1919A6
Light Machinegun
ブローニング
.30口径 M1919A6
軽機関銃



全長 1,346mm
口径 .30-06
装弾数 ベルト給弾

第一次世界大戦時に米軍が採用したM1917 重機関銃の改良型で、朝鮮戦争時まで活躍した水冷式重機関銃です。M1917 重機関銃は、ジョン・M・ブローニングが1901年に取得した反動利用方式の патент を基に設計され、マキシム式機関銃より重量が軽く抑えられていた他、高い信頼性を備えていました。作動方式は反動利用のショート・リコイル式で、垂直にスライドするロッキング・ブロックにより閉鎖が行われ、クローズド・ボルト位置から射撃を行います。標準のM1917三脚にはT&E (Traverse and Elevation) 機構が内蔵されていました。1936年に採用された改良型のM1917A1では、レシーバーのボトム・プレート



本機体のレシーバー右側面には「BROWNING MACHINE GUN U.S. CAL. .30 M1917A1」のモデル名やメーカー刻印が入っています。

ブローニング M1919 機関銃は、ブローニング M1917 を水冷式に改良し、軽量化を行ったモデルです。三脚を装備したバリエーションである M1919A4 に対し、M1919A4 を基に開発された軽機関銃モデルは M1919A6 と呼ばれ、着脱可能なショルダー・ストックや折り畳み式の二脚、キャリング・ハンドルが追加された他、銃身が軽量化されました。M1919A6 は第二次世界大戦後期から投入され、朝鮮戦争時には多数が使用されました。M1919A6 は BAR と M1919A4 の運用面でのギャップを埋める事が期待されましたが、軽機関銃としては重い本体重量や低い射撃安定性、銃身の軽量化に伴う継続射撃能力の不足などにより、現場からの評価は芳しいものではありませんでした。



二脚基部には、二脚を折り畳んだ状態で前方の支えとして使用する「ハイボッド・レスト・レッグ」式と呼ばれる脚を備えています。

Stevens Model 320 Shotgun

Stevens Model 320
Shotgun
スティーブンス M320
ショットガン



全長 995mm
口径 12GA
装弾数 5+1発



MP43 Assault Rifle

MP43 突撃銃
MP43 Assault Rifle



全長 930mm
口径 7.92mm×33
装弾数 30発



米国のサベージ (Savage) 社がスティーブンス (Stevens) のブランドで販売しているポンプ・アクション式散弾銃で、ローテティング・ボルト及びデュアル・スライド・バーを装備しています。製造は中国の SUN CITY MACHINERY 社により行われ、サベージ社が輸入・販売を行っています。スティーブンス M320 には 22-28 インチのリップ付き銃身を装備したフィールド・グレードの他、リップの無い 18.5 インチ銃身を装備するセキュリティ・モデルがラインナップされています。セキュリティ・モデルは黒色マット仕上げの樹脂製ストック及びフォア・エンドを装備しており、通常のバット・ストックの他、ピストル・グリップの装備されたモデルも存在します。



フォア・エンドにはスティーブンスのブランド名が大きく入っています。

第二次世界大戦中のドイツで開発された、セミフル・オートマチック射撃の切り替えが可能な自動小銃で、中間弾薬である 7.92mm×33 クルツツを使用します。ドイツ軍では、従来装備していた Kar. 98k 小銃は連射性に欠け、MP40 短機関銃は射程や命中精度が不十分であったことから、戦場の実態に即した 300m 前後の交戦距離に最適な自動小銃の開発が進められ、ハーネル社が 1942 年に開発した MKb. 42 (H) を基に改良を加えたモデルに対して、1943 年に MP43 の名称が与えられました。翌 1944 年には MP44 と改称され、最終的にヒトラーがその有効性を認めた事で、Sturmgewehr (突撃銃) 44 の名称が与えられました。本銃は、世界初の本格的なアサルト・ライフルとされます。



トリガー後方にレバー・タイプのセーフティを備え、その上方にはクロス・ボルト式のセレクトラー・スイッチを備えています。

写真はすべて所有物写真です。

HK SL8-1 Self-loading Rifle

HK SL8-1
Self-loading Rifle
HK SL8-1
自動小銃



全長 975mm
口径 5.56mm×45
装弾数 10発



Walther MPK Sub Machinegun

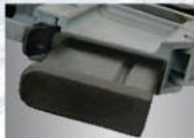
Walther MPK
Sub Machinegun
ワルサー MPK
短機関銃



全長 653mm
(368mm)
口径 9mm×19
装弾数 32発



HK SL8は、ドイツのHeckler & Koch(HK)社が同社の軍用自動小銃であるG36をベースに開発した民間向けの自動小銃で、1998年に発表されました。作動方式はベースとなったG36と同様のショート・ストローク・ピストンを用いたガス圧利用方式で、射撃機能はセミ・オート・マチック射撃のみとなっています。ポリマー製の銃床はモジュラー設計となっており、ハンドガードやマガジン・ハウジングは容易に交換可能です。銃床はサム・ホール・タイプで、調整可能なチーク・レストを備えており、ブル・レングスの調整も可能です。米国輸出向けモデルであるSL8-1の銃床はグレー色で、ロング・タイプのサイト・レール及び冷却孔のないハンドガードを備えています。



マガジンはシングル・コラムの10発タイプが標準となっています。

ワルサー MPKシリーズは、ドイツのワルサー社が1950年代末に開発した短機関銃で、イタリアのルイギ・フランキ社が開発したLF57短機関銃等と同様のプレス製レシーバー及びL字型ボルトを備えたフラットな形状が特徴です。コッキング・ハンドルはボルトと独立しており、射撃中に前後しない構造となっており、セレクター・レバーはアンビ・タイプとなっています。ワルサー MPKシリーズには銃身長長の異なる二種類のモデルが存在し、ロング・バージョンがMPL、ショート・バージョンがMPKと呼ばれます。本銃は戦後のオープン・ボルト式短機関銃としては後発で、比較的高コストだった事もあり、大規模な採用はありませんでしたが、限定数が西ドイツ警察やメキシコ海軍等に採用されました。



アップグレードレシーバーには「Mod. Kurz」、ローレシーバーには「MPK 9mm Para」のモデル名刻印が入っています。

LEI M4A1 Suppressed Carbine

LEI M4A1
Suppressed Carbine
LEI M4A1 カービン
(サイレンサー内蔵モデル)



全長 796mm
(718mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発

LEI M4A1 9mm Carbine

LEI M4A1
9mm Carbine
LEI M4A1 カービン
(9mm口径モデル)



全長 699mm
(623mm)
口径 9mm×19
装弾数 30発

英国のLEI社(Law Enforcement International Ltd.)が製造した、M4カービンの派生型です。LEI社は元々サイレンサーの製造を行っていましたが、現在では特殊用途での小火器製造やカスタムも手掛けています。LEI社製のM4カービンは、主に米国防政府の管理下にある米国防器メーカーでは供給が難しいPMC(民間軍事会社)向けに販売されていますが、英国海兵隊コマンド(Royal Marine Commando)でも使用されています。本品はLEI社製M4カービン・クロンをベースにサイレンサーを内蔵したバリエーションで、フルオートマチック射撃も可能なセレクトレブ・ファイア・モデルとなっています。



4面レール・タイプのハンドガードにサイレンサーを組み合わせた仕様となっています。

英国のLEI社(Law Enforcement International Ltd.)が製造した、M4カービン・クロンの派生型です。本品はLEI製M4カービン・クロンをベースに、使用弾薬の変更に伴い、動作はストレート・ブローバック方式となっています。マガジン・ハウジング内には9mm弾用のマガジンに対応したスパーサーが追加されており、マガジンの着脱は既存のマガジン・キャッチにより行う事が可能です。アッパー・レシーバーは、ボルト・フォワード・アシストを備えず、排英孔後方には大型のケース・デフレクターが追加されています。尚、排英孔のサイズが短縮された事に伴い、排英孔カバーの後部が切除加工されています。



マガジン・ハウジングを側面には、LEIのメーカー・ロゴやシリアルNo.の他、「9MM NATO」の11桁表示刻印が入っています。

Manroy ME16X4 Rifle

Manroy
ME16X4 Rifle
マンロイ
ME16X4 自動小銃



全長 1,007mm
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



Manroy ME4X1 Carbine

Manroy ME4X1 Carbine
マンロイ ME4X1 カービン



全長 864mm
(777mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 20/30発



英国のマンロイエンジニアリング社により製造された、M16A4 自動小銃のクローン・モデルです。M16A4はM16A2の発展型の一つで、M4 カービンに採用されたレシーバー上面のピカティニーレール及び着脱式のキャリングハンドルを導入したモデルです。本銃のマンロイ社におけるモデル名はME16X4ですが、基本的な仕様はオリジナルのM16A4と同様で、セミ/フルオートマチック射撃の切り替えが可能なトリガーグループを備えています。1975年に設立されたマンロイ社は、英国国防省に小火器やその部品を供給してきましたが、2017年にベルギーのFNハースタール・グループの傘下となり、現在はFNH UKとして英国におけるFN社製品の製造を手掛けています。



レシーバー左側面には、マンロイ社のメーカー刻印や「MODEL:ME16X4 5.56MM NATO」のモデル名刻印が入っています。

英国のマンロイエンジニアリング社が生産したM4A1 カービンのクローン・モデルです。2009年まで、M4 カービンの製造に関する契約は、コルト社と米国政府の間で独占的に締結されていました。しかし、2009年に米陸軍がM4 カービンの設計に関する完全な所有権を取得した事により、コルト社以外のメーカーも独自のM4 カービンを開発・製造する事が可能になりました。その結果、M4 カービンは様々なメーカーで独自の改良型やコピー・モデルが生産されるようになり、「M4 クローン」と呼ばれる製品が多数登場しました。本銃もそのようなM4 クローンの一つで、マンロイ社におけるモデル名は「ME4X1」ですが、基本的な仕様はオリジナルのM4A1 カービンと同様です。



レシーバー左側面には、マンロイ社のメーカー刻印や「MODEL:ME4X1 5.56MM NATO」のモデル名刻印が入っています。

ブレン軽機関銃の開発と発展

第一次世界大戦で猛威を振った重機関銃は、戦中からさらなる軽量化を志向し、軽機関銃の発展の萌芽となりました。終戦後もまもなく各国で開発が行われた軽機関銃ですが、イギリスは先んじて開発が進んでいたチェコスロバキアのZB26に着目します。これはやがて、傑作軽機関銃と知られるブレン軽機関銃へと繋がりました。

第一次世界大戦終結後、イギリス軍はルイス軽機関銃の後継を求めました。1922年にBARを候補としたのを皮切りに、数年にわたってマドセン、ピアドモア・フーカー、ホッチキス、シャデルロー、マククラドゥン、フラーといった当時最新の軽機関銃をテストし、1930年に.303口径仕様のZB26を後継機関銃としました。



ZB26はチェコスロバキアにおいて開発されました。第一次世界大戦の終結後に建国されたチェコスロバキアでは、装備の統一と近代化を目指して軽機関銃の開発が開始されました。

1920年からブラガ社で開発されたブラガ I 軽機関銃は、MG08/15のアモ・ベルトを使用するベルト給弾方式でしたが、同時進行で行われた外国製軽機関銃の試験結果に基づき、マガジン給弾方式へと方針が定まり、ZB26の原型となるブラガ M24軽機関銃が開発されました。

なお、ブラガ社ではほぼ手作業で開発が行われ、設備の構築と生産はブルノ造兵廠によって行われました。その後、材質の変更による長寿命化などの改良を施されたモデルがZB26と呼ばれるようになりました。



ZB26のヒンジによる結合(左)とブレンの上下分割(右)

1932年には、さらなる改良の要求がイギリスからチェコに対して行われ、アッパー及びロア・レシーバーの結合が、ZB26のヒンジによる方式から、スライドして上下に分離する方式へと変更されました。



その後、弾倉容量の変更や発射速度を抑えるなどの改良を重ね、ZGB Vz.33、ZGB Vz.34等のモデルを経て、ブレン軽機関銃の開発に至りました。

Bren Mk I



1935年にイギリス政府とブルノ造兵廠の間で契約が結ばれ、試作品の生産や工作機械の調達が行われました。1937年9月3日に最初のロットが完成しましたが、それ以前に生産された試作品は速やかにカナダへと送られ、生産設備の開設に活用されました。これは開戦が間近に迫っている事を見越しての対応と考えられています。

Bren Mk II



1941年から生産された戦時簡易生産型でリア・サイトとバット・ストックが単純化され、折り畳み式ショルダー・レストや銃床下部のサポート・ハンドルについても省略、二脚の長さ調整機能も省略されるなど、変更は多岐にわたります。Mk IIで採用された一部の改良は、戦時中に生産されたMk Iにも取り入れられました。

Bren Mk II/I



ブレン Mk II のレシーバーにブレン Mk I 用のコッキング・ハンドル・アッセンブリーを組み合わせたモデルです。Mk II タイプのコッキング・ハンドルの不足を解消する為に行われた措置で、Mk I タイプのコッキング・ハンドルを適合させる為にはMk II のレシーバーの工程が変更されました。

Bren Mk III



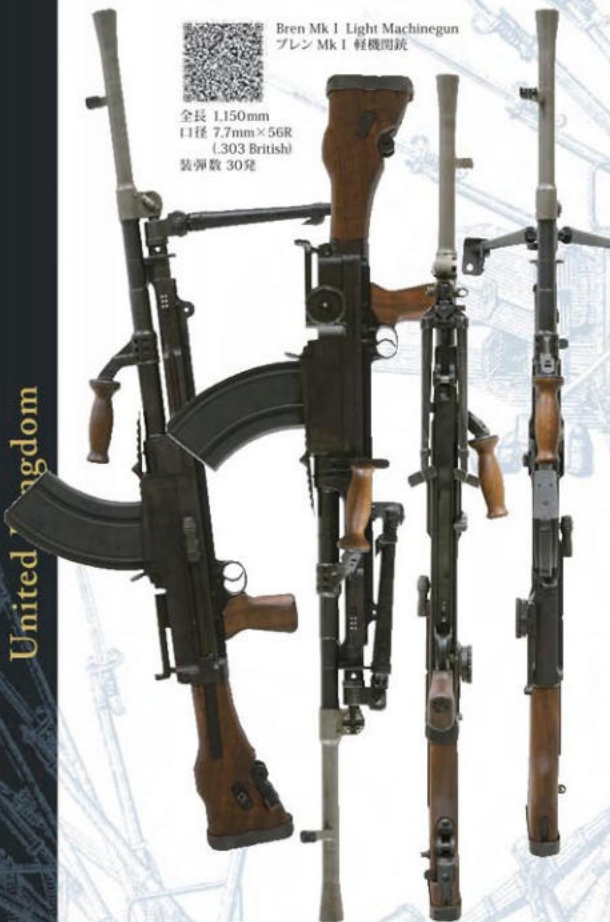
空挺部隊やジャングル戦向けの軽量短縮型として開発され、1944年より生産されました。ガス・シリンダー周辺に軽量化が施され、銃身の短縮化やバット・ストックの改良が行われています。エンフィールド造兵廠によって約57,600挺が生産され、量産型としてはシリーズ最後の.303口径モデルとなりました。

Bren Mk I Light Machinegun



Bren Mk I Light Machinegun
ブレン Mk I 軽機関銃

全長 1,150mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 30発



Bren Mk II Light Machinegun



Bren Mk II Light Machinegun
ブレン Mk II 軽機関銃

全長 1,158 mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 30発



1920年代に英軍はルイス軽機関銃に代わる新型軽機関銃の選定作業を開始し、1930年代に入るとチェコのZB Vz.26の改良型であるZB Vz.27(後に更なる改良型のZB Vz.30)を新たに候補に加えてトライアルが続けられ、最終改良型のZGB Vz.34 Model 4 Type 2に小改良を加えたモデルが1935年にブレン Mk I として英軍に採用されました。ブレン(Bren)の名称は、チェコのブレン(Bрно)造兵廠と英国のエンフィールド(Enfield)造兵廠の名称を組み合わせた物です。戦時生産型のブレン Mk I では、ショルダーレストやサポートハンドルが省略され、本体の切削加工等が一部簡略化されたタイプも存在します。



ブレン Mk I は200ヤードから2,000ヤードに対応したダイヤル式リアサイトを備えています。

ブレン Mk I 軽機関銃の製造工程を簡略化し、1941年から生産された戦時簡易生産型がブレン Mk II です。本体の切削加工工程が削減された他、ダイヤル式リアサイトは起倒式に変更され、コッキングハンドルは折り畳み式から小型の固定式に変更されました。また、ショルダーレストや銃床下部のサポートハンドルが省略された他、バットプレートがリッファー・スプリング内蔵のカップ型から単純なフラット型に変更され、二脚についても長さ調整機能のないタイプになりました。銃身についても簡略化され、フラッシュハイダーとフロント・サイト・アセンブリーはガス・ブロックから分離されました。尚、ストック内のリコイル・スプリングは二重式に変更されています。



ブレン Mk II のリアサイトは、エレベーションの微調整機能を備えた起倒式となっています。

Bren Mk II/I Light Machinegun

Bren Mk II/I Light Machinegun
ブレン Mk II/I 軽機関銃

全長 1,158mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 30発



Bren Mk III Light Machinegun

Bren Mk III Light Machinegun
ブレン Mk III 軽機関銃

全長 1,115mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 30発



ブレン Mk II/I 軽機関銃は、ブレン Mk II のレシーバーにブレン Mk I 用のコッキングハンドル・アッセンブリを組み合わせたモデルです。この措置は、折り畳み機能のない Mk II タイプのコッキングハンドルの供給不足を解消する為に行われたもので、Mk I タイプの折り畳み式のコッキングハンドルが使用できるよう、ブレン Mk II のレシーバーのコッキングハンドル・スロット前部にストックをロウ付けする改修が行われています。その後、Mk II タイプのコッキングハンドルの不足が解消されるにつれて、既存のブレン Mk II/I のコッキングハンドルを Mk II タイプに交換する改修が行われました。



ブレン Mk II とは異なり、ブレン Mk I と同タイプの折り畳み式のコッキングハンドルを備えています。

ブレン Mk III 軽機関銃は、1944 年から製造が開始された、実戦に投入された量産型としてはシリーズ最後の 303 口径モデルで、当初は空挺部隊やジャングル戦向けの軽量短縮型として開発されました。ブレン Mk III では、ガス・シリンダー周辺等に軽量化加工が施された他、銃身の短縮化やバット・ストックの改良が行われました。二脚は脚の長さ調整機能を備えた Mk I タイプに戻されましたが、長さ調整機能のない Mk II タイプの二脚を備えた個体も存在します。第二次世界大戦中には、ブレン Mk III はエンフィールド造兵廠によって約 57,600 挺が生産され、戦後、多くが 7.62mm×51 NATO 弾仕様のブレン L4 軽機関銃に改修されました。



ブレン Mk III では、バット・プレートがフラットな形状となっています。

Bren L4A3 Light Machinegun

Bren L4A3 Light Machinegun
ブレン L4A3 軽機関銃

全長 1,082mm
口徑 7.62mm×51
装弾数 30発

Lewis M1914 Light Machinegun

Lewis M1914 Light Machinegun
ルイス M1914 軽機関銃

全長 1,283mm
口徑 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 47/97発

第二次世界大戦後、イギリスではブレン軽機関銃の使用弾薬を.303ブリティッシュ弾から7.62mm×51 NATO弾に改修したモデルであるブレン L4 軽機関銃が開発されました。ブレン L4 軽機関銃は、いずれも既存のブレン Mk III もしくは Mk II からの改修により生産されており、ベースとなったモデルや仕様の違いにより L4A1 から L4A9 までのモデルが存在します。ブレン L4A3 軽機関銃は、ブレン Mk II をベースに L4A2 と同様の改修を施したモデルで、ブレン Mk II もしくはブレン Mk II からの改修により 134 挺のみ生産されました。ブレン L4A3 は一部がリビア向けに輸出され、残りは英軍により使用されたと言われています。



使用弾薬の変更に伴い、マガジンは L4A1 自動小銃と互換性のあるタイプに変更されています。

1911年に米陸軍のアイザック・ニュートン・ルイス(Isaac N. Lewis)大佐により開発された軽機関銃です。銃身にはアルミニウム製の放熱用ラジエーター及びこれを収める筒状のバル・ジャケットを備えています。発射時には銃口からのガスの噴出に伴い、バル・ジャケット内に空気が後方から流れ込み、強制的に空冷が行われます。本体下部の半円状のケース内にはゼンマイ式のリターン・スプリングが収められており、ギアを介してボルト・グループを前方に押し戻す構造となっています。弾倉自体には弾薬を送り出すスプリングは内蔵されており、マガジン・カバーの外側のリブに噛み合う特殊なアームを介して、ボルト・グループの前後サイクルに連動した給弾が行われました。



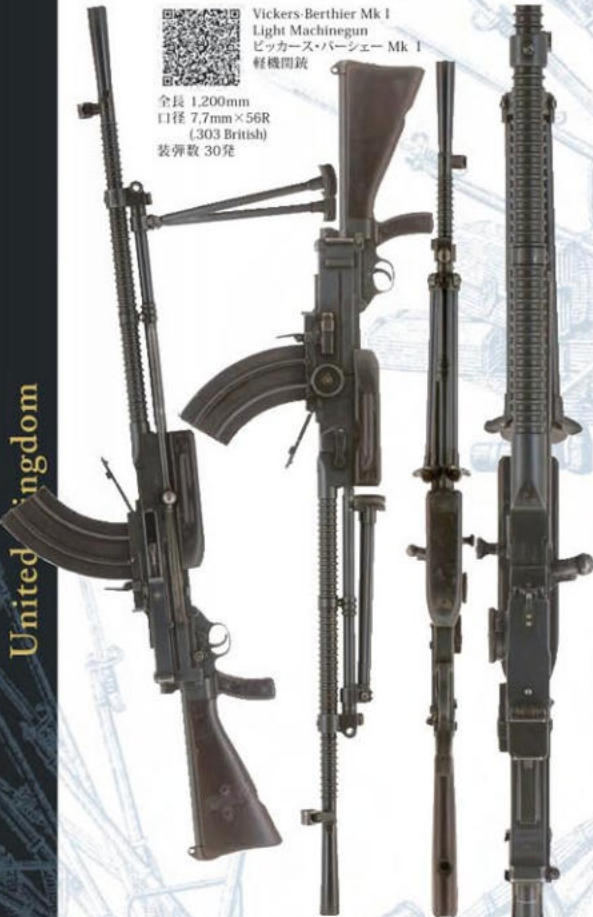
レシーバー上面には英国のBSA社がベルギーのルイス社向けに製造した事を示す刻印が入っています。

Vickers-Berthier Mk I Light Machinegun



Vickers-Berthier Mk I
Light Machinegun
ビッカース・バーシエー Mk I
軽機関銃

全長 1,200mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 30発



Vickers Class K (G.O. No.1 Mk I) Machinegun

Vickers Class K
(G.O. No.1 Mk I)
Machinegun
ビッカース クラス K
(G.O. No.1 Mk I)
機関銃



全長 1,005mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 100発



フランスのアンドレ・ベルチエー (André Berthier) が設計し、英国のビッカース・アームストロング社で生産された軽機関銃です。本銃の原型となる機関銃は、米陸軍が1917年に性能試験を行い、一度は採用が決定していましたが、生産設備の準備が第一次世界大戦に間に合わず、実質的な生産は行われませんでした。その後、1925年にビッカース社が製造権を取得し、1932年に始まった英軍のトライアルに提出されましたが、最終的にはルイスガンの後継としてブレン軽機関銃が採用されました。ビッカース・バーシエー軽機関銃には Mk I から Mk III までのバリエーションが存在し、1928年に導入された Mk I は、短いハンドガードと銃身の冷却フィンを備えたモデルです。



マガジン挿入孔にはロビンソンのダストカバーを備え、マガジンリリーフスレール後方にカバーのロック解除用ラッチが設けられています。

ビッカース K 機関銃は、英国のビッカース・アームストロング社によって1928年に開発され、1934年頃に軍用機の防衛火器として英空軍に採用された航空機関銃で、英空軍ではビッカース・ガスオペレーテッド (ビッカース G.O.) と呼称されました。作動方式はロングストローク・ピストンを用いたガス圧利用方式で、ティルティング・ボルト方式の閉鎖機構を備えています。給弾は本体上部に装着される100連バン・マガジンから行われます。本銃は1940年代初頭には航空機関銃として時代遅れとなり、装備更新により余剰となった物が基地防衛用として空軍地上部隊に配備され、様々な用途の対空銃架に搭載されました。また、英空軍の特殊部隊である SAS も本銃をジープに装備して使用しました。



グリップフレーム後端上部にはセーフティ・キャッチを備えています。

BSA .303 Browning Machine Gun Mk II*



BSA .303 Browning
Machine Gun Mk II*
BSA .303 ブローニング
Mk II* 機関銃



全長 1,000mm
口径 7.7mm×56R
(.303 British)
装弾数 ベルト給弾

Besa Mk III* Tank Machinegun



Besa Mk III*
Tank Machinegun
ベサ Mk III*
車載機関銃



全長 1,104mm
口径 7.92mm×57
装弾数 ベルト給弾

第二次世界大戦中に英国および英連邦の航空機に搭載されて広く使用された標準的な航空機関銃で、米国のブローニング .301口径 AN/M2 機関銃を基に、英軍向けに複数の改良が加えられています。1936年から製造されたMk Iは、連射した際の加熱により暴発が発生する恐れがあったことから、1937年に制式化された改良型のMk IIでは発射方式がオープンボルト式に改められた他、発射速度が変更されました。また、連続発射後の銃口延長部の汚れを軽減する為、銃口延長部を再設計し、クロム・メッキ処理や冷却フィンを追加する等の改良も加えられました。Mk II*は、Mk IIIマズル・ブースター及びMk IIフラッシュ・ハイダーを備えたタイプです。



本機体のレシーバー上面には、モデル名
「B.S.A」のメーカー刻印、製造年を
示す「1939」の刻印が入っています。

チェコスロバキアで開発されたZB53 (Vz.37) 重機関銃を基に、英国でライセンス生産された車載機関銃です。第二次世界大戦中、ベサ車載機関銃は戦車を始めとする英軍の装甲車両に搭載され、その高い信頼性から広範に使用されました。本銃は当時英軍で一般的に使用されていた .303 ブリティッシュ弾ではなく、オリジナルのZB53と同様に 7.92mm×57 モーゼル弾を使用するよう設計されていました。ベサ Mk III 及び Mk III* は、生産効率を上げる為に開発された簡略型で、Mk II や Mk II* が備えていた発射速度切り替え用のセレクターは廃され、Mk III では発射速度が 750~850 発/分、Mk III* では 450~550 発/分 で固定されていました。



コッキング操作はグリップを前後にスライドさせて行います。グリップ着用時に操作しやすいよう、トリガーとトリガーガードは大型となっています。

写真はすべて無断複製禁止です。

Revelli-Beretta M1915 Self-loading Carbine

Revelli-Beretta M1915
Self-loading Carbine
レベリ・ベレッタ
M1915 カービン



全長 865mm
口径 9mm×19
装弾数 25発



Beretta M12S Sub Machinegun

Beretta M12S
Sub Machinegun
ベレッタ M12S
短機関銃



全長 657mm
(422mm)
口径 9mm×19
装弾数 20/32/40発



イタリア陸軍から1917年半ばに出された歩兵突撃用の新型自動小銃の開発依頼に基づき、ベレッタ社で開発された半自動式カービンです。ピラール・ベロサ機関銃を改造して単銃身とし、銃床を追加する形で開発され、基本構造はアビエル・ベテル・レベリ (Abiel Bethel Revelli) 少佐がピラール・ベロサ機関銃やレベリ O.V.P. 短機関銃の開発時に取得していた特許に基づいています。作動方式は慣性遅延ブローバック方式で、発射時にボルトがコッキングハンドル用スロット内の傾斜に沿って回転しながら後退しました。尚、本銃の銃床及び折り畳み式銃剣はカルカノ騎兵銃、トリガーガードはベテリ M1870/87 小銃からの流用となっていました。



本体上部に装着されるマガジンを避ける為、フロントサイト及びリアサイトは本体右側にオフセットして取り付けられています。

1959年にベレッタ社で開発され、1961年にイタリア軍が制式採用したベレッタ M12 短機関銃を基に改良を加えたモデルです。M12と同様、作動方式はオープン・ボルト方式のシンプル・ブローバックで、銃床本体はプレス加工と溶接による生産性に優れた設計がなされており、L字型ボルトの採用により全長の短縮を図っています。M12ではマニュアル・セーフティとセレクターが独立した貫通式のボタンとなっていたが、改良型のM12Sではそれぞれの機能を統合したレバー式に変更されました。さらに、レシーバー・エンド・キャップのキャッチが大型化してリアサイト後方に移された他、ストックのバットプレートにプッシュ・ボタンスのロックが追加されるなどの改良も行われています。



マニュアル・セーフティとセレクターは統合され、セレクター表示は「S (安全位置) - I (準発) - R (連射)」となっています。

Breda 5C Medium Machinegun



Breda 5C Medium Machinegun
ブレダ 5C 機関銃

全長 1,205mm
口径 6.5mm×52
装弾数 20発



Breda 5G Light Machinegun



Breda 5G Light Machinegun
ブレダ 5G 軽機関銃

全長 1,220mm
口径 6.5mm×52
装弾数 20発



イタリアのブレダ社によって1920年代に設計された中機関銃です。ブレダ 5Cには後にブレダ M1930 軽機関銃に受け継がれる複数の特徴が見られ、装填は本体側面のヒンジで開閉する箱型弾倉にスリッパ・クリップを用いて行いました。一方、スベード・グリップでありながら着脱式のバット・ストックを備えるなど、機関銃としては独特の形態となっています。高、標準の三脚は、銃本体を運搬の際のキャリアとしての機能も備えていました。ブレダ 5Cは性能試験で満足のいく結果を得られなかったものの、自動火器の不足に悩まされていたイタリア陸軍に採用され、第二次世界大戦中にはトリポリのメハリスト(ラクダ騎兵)によって使用された他、フィアット 611 装甲車にも搭載されました。



トリガーはプッシュ式で、スベード・グリップの基部上部にはセーフティ・レバーが設けられています。

1920年代にイタリアのブレダ社で開発された中機関銃であるブレダ 5C 機関銃を基に、軽機関銃仕様に変更したモデルです。基本構造はブレダ 5C 機関銃と同様ですが、弾倉やレシーバーの形状が一部変更された他、スベード・グリップに代わってピストル・グリップ及び固定式バット・ストックを備えています。また、三脚は廃され、代わりにバレル・ホルダー・スリーブに二脚が追加で取り付けられているなど、軽機関銃としての運用を可能としています。高、バット・ストックの下部には伸縮式の一腳を備えています。ブレダ 5G 軽機関銃は、ブレダ M1930 軽機関銃に受け継がれる特徴を多く備えています。フィード・カバー上面のオイラー蓋の位置や形状等に違いが見られます。



レシーバー上面には「BREDA 5G」のモデル名の他、製造年やファスネスの刻印が入っています。

Breda M1930 Light Machinegun

Breda M1930
Light Machinegun
ブレダ M1930
軽機関銃



全長 1,230mm
口径 6.5mm×52
装弾数 20発

Breda Bren Light Machinegun

Breda Bren
Light Machinegun
ブレダブレン
軽機関銃



全長 1,073mm
口径 .30-.06
装弾数 30発

1930年にイタリア軍が採用した、6.5mm×52カルカノ弾を使用する軽機関銃です。作動方式は薬室周辺に設けられたロータリー・ロッキング・ナットによるショート・リコイル方式でしたが、薬室からの薬莢の一次抽出に難があった事から、給弾機構に塗油機能を備えていました。しかしながら、北アフリカ地域ではこの機能により砂塵等が機関部内に入り込み、かえって作動不良の原因となりました。また、射撃はクローズド・ボルト位置から行われましたが、これは連続射撃時の熱により薬室内の弾薬が自然に発射されてしまうクック・オフ現象の原因となりました。本体右側面には折り畳み機構を持つ固定式弾倉を備えており、20連のストリッパー・クリップを使用して弾倉への給弾を行いました。



レシーバー上面には「MITR. LEGG. MOD.30」のモデル名やメーカー刻印、ファシスト暦による製造年を示す刻印が入っています。

イタリアのブレダ社(Breda Meccanica Bresciana)により生産された、.30-06弾仕様のブレン Mk II 軽機関銃です。ブレダ社製のブレン Mk II では、使用弾薬の変更に伴い、ガス・ブロックが前方に配置されているのが外見上の特徴です。30-06弾仕様のブレン Mk II 軽機関銃の生産は、1959年から1970年代半ばまでブレダ社で行われ、治安維持を任務とするイタリア国家警察所属の部隊であるCorpo Delle Guardie Di Pubblica Sicurezza向けに供給されました。レシーバー右側面には、Breda Meccanica Brescianaの頭文字である「BMB」のメーカー刻印が入っています。



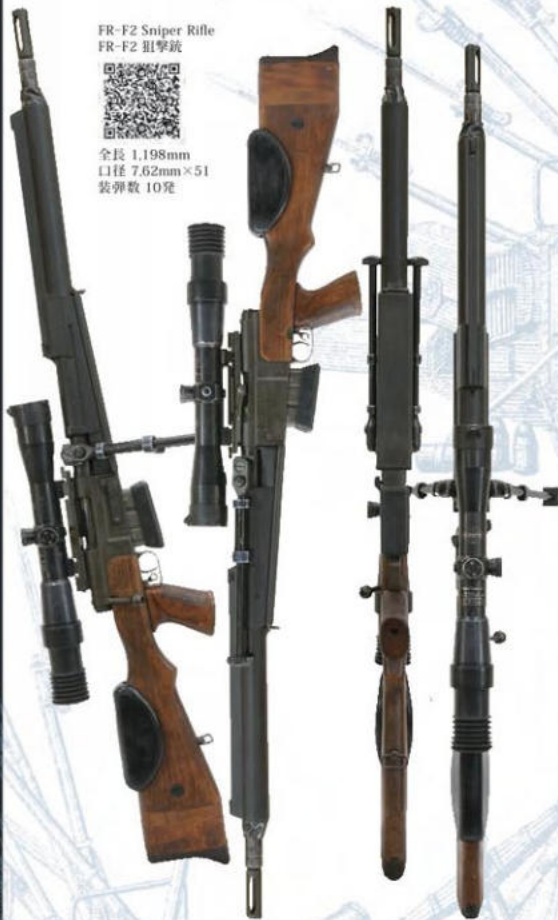
レシーバー右側面のモデル名刻印は、「BREN Mk II Cal. 7.62」となっています。

FR-F2 Sniper Rifle

FR-F2 Sniper Rifle
FR-F2 狙撃銃



全長 1,198mm
口径 7.62mm×51
装弾数 10発



AAT-52 General Purpose Machinegun

AAT-52 General Purpose
Machinegun
AAT-52
汎用機関銃



全長 1,144mm
(1,013mm)
口径 7.5mm×54
装弾数 ベルト給弾



1986年からフランス軍で使用されているボルト・アクション式の狙撃銃で、MAS Mle 1936小銃から派生した狙撃銃であるFR-F1の改良型です。新型のフリー・フローティング構造の銃身には、熱を均等に拡散する為に耐熱樹脂製のサマル・ジャケットが装備されており、銃身加熱による歪みや銃身の放熱による陽炎で視界が妨げられる事を防いでいます。後部銃床は木製で、ピストル・グリップを備えています。バット・ストックはスベササーにより長さの調整が可能で、チークレストの取り付けも可能です。二脚がハンドガード側面に取り付けられていたFR-F1とは異なり、FR-F2の二脚はレシーバー前方に設けられた円形のスリーブの上部に取り付けられています。



本銃体にはフランス陸軍向けのSCROME J8 Mle F1スコープが搭載されています。

FM Mle 1924/29 軽機関銃及び外国製の種多な機関銃を更新する目的で、1952年にフランスで開発された汎用機関銃です。開発はサン・ティエヌ兵器製造所が行い、ボルトの側面に回転式のレバーを設けて、レシーバー右側面の突出部の内部に設けられたロッキング・ピースと噛み合う構造とした、レバー遅延ブローバック方式を導入しました。二脚や三脚を使用しての射撃が可能で、三脚使用時には重銃身が装着され、より持続的な射撃が可能となります。1960年代末、フランスは7.5mm×54弾に代わって7.62mm NATO弾を採用することを決定し、これを使用する派生型としてNF-1と呼ばれるモデルが開発され、新規生産やAAT-52からの改修が行われました。



本銃体は7.5mm×54弾仕様のAAT-52で、銃身はFM-52-270-75の刻印が入っています。

1970年代のフューチャー・ウェポン ステアー AUG 自動小銃

照準基線長を確保しづらいブルパップ式の照準精度を補うため、低倍率スコープが標準装備されているほか、樹脂パーツを多用することで軽量化が図られています。ユニット化されたトリガー・バックをストック内に収納する設計は後のFN P90 短機関銃やFN F2000 自動小銃にも採用されるなど、後世に与えた影響も大きいと言えるでしょう。



グリップは人間工学に基づいて設計されており、大型のトリガー・ガードによって冬季の手袋使用時にも対応しています。



折り畳み式のパーティカル・フォア・グリップが標準装備されており、銃を安定して保持することが可能です。



登場時から現行型に至るまで、スチール・レインサート補強を用いない一体型の樹脂製マガジンが採用されています。



ストック内部にはユニット化されたトリガー・バックの他に、クリーニング・キット類も収納可能です。



〔スタンダード・モデル〕

20インチ・バレルを持つ基本型です。映画でもよく目にするタイプで、「AUGといったらコレ」というイメージの方も多いかもしれません。



〔分隊支援火器型〕

一脚と24インチのヘビー・バレルを装備したタイプです。オプションの42連ロング・マガジンも使用されました。



〔カービン・モデル〕

16インチ・バレルを備えた短縮型で、装甲車での移動や市街地戦闘に適したショート・モデルとなっています。



〔短機関銃〕

主に警察向けに開発された9mm×19パラベラム弾を使用する短機関銃型で、ステアー MPi69/81短機関銃の32連マガジンを使用します。

Steyr AUG A1 Bullpup Carbine



Steyr AUG A1
Bullpup Carbine
ステアー
AUG A1 カービン

全長 717mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発

Steyr AUG A3 Bullpup Assault Rifle



Steyr AUG A3
Bullpup
Assault Rifle
ステアー AUG A3
自動小銃

全長 799mm
口径 5.56mm×45
装弾数 30発



ステアー AUGは、オーストリアのステアー(シュタイヤー・マンリヒャー)社が開発したブルパップ式の自動小銃で、SIG 58自動小銃の後継として1977年にSIG 770の制式名でオーストリア軍に採用されました。1982年に登場したステアー AUG A1は、初期生産型のAUGに改良を加えたモデルです。AUGのボルト・キャリアは、作動中もハンマーによって常時上方に押し上げられていますが、AUG A1ではボルト・キャリア後方上部にローラーが追加され、レシーバー内面との摩擦による抵抗を軽減しています。AUGは用途に合わせて銃身を容易に交換可能で、銃身長が20インチのスタンダード・モデルに対して、短縮型のカービン・モデルでは16インチの銃身が組み合わされます。



コッキング・ハンドル後部のボタンを押しながらハンドルの前進させる事により、ボルト・フォワードアシストとして機能します。

ステアー AUG A3 自動小銃は、AUGをさらに近代化した最新モデルで、アッパー・レシーバーにピカティニー・レール・システムが追加されており、各種光学機器を搭載する事が可能となっています。また、ストック左側面にボルト・リリース機能が追加されているのも特徴です。本品は20インチ銃身及びOD色の樹脂製ストックを備えたステアー AUG A3 自動小銃で、アッパー・レシーバー上面にピカティニー・レールの代わりにスコア内蔵のキャリング・ハンドルを備えたバリエーションです。銃身にはピカティニー・レールを下側に備えたアダプターが取り付けられており、ステアー GL40等のアングラー・バレル・グレート・ランチャーを取り付ける事が可能となっています。



ストック左側面にはボルト・リリース・ボタンを備えています。

Steyr AUG A3 Bullpup Carbine



Steyr AUG A3
Bullpup Carbine
ステアー AUG A3
カービン



全長 714mm
口徑 5.56mm×45
装弾数 30発

Steyr AUG Z A3 Jagdkommando Bullpup Carbine



Steyr AUG Z A3
Jagdkommando
Bullpup Carbine
ステアー AUG Z A3
ヤークトコマンド
カービン
全長 715mm
口徑 5.56mm×45
装弾数 10/30発

従来のステアー AUG シリーズと同様、ステアー AUG A3もモジュラー設計により銃身の交換を容易に行う事が可能で、15インチ、16.4インチ、20インチの長さの異なる3種類の銃身が用意されています。本品は16.4インチ銃身及びOD色の樹脂製ストックを備えたステアー AUG A3 カービンで、

アッパー・レシーバー上面にピカティニー・レールの代わりにスコープ内蔵のキャリング・ハンドルを備えたバリエーションです。付属のスコープは、上面及び右側面にアクセサリ・レール（ピカティニー・レール）を備えています。その他にも、ステアー AUG A3ではレシーバー右側面にショートタイプのアクセサリ・レールが45°の角度で取り付けられています。



付属のスコープの上面及び右側面の他、レシーバー右側面にアクセサリ・レールを備えています。

オーストリア連邦軍が保有する特殊部隊「ヤークトコマンド (Jagdkommando)」が運用するAUG A3のバリエーションを基に、セミオートマチック仕様としたモデルです。セミオートマチック仕様となっている以外は、オリジナルのヤークトコマンド仕様のAUG A3と同等のスペックとなっており、オリーブ・グリーン色の特殊コーティングや16.4インチのショートバレル、そしてヤークトコマンド仕様専用となるミルドット・レティクル付きのスコープを備えています。このスコープは通常モデルに比べて低い位置に配置され、上面や側面には追加のドット・サイト等を装着出来るようピカティニー・レールを備えており、ヘルメットやガス・マスクを装着した状態での照準を容易にしています。



専用スコープのハウジングについても、オリーブ・グリーン色の特殊コーティングが施されています。

Steyr-Solothurn S1-100 Sub Machinegun



Steyr-Solothurn S1-100
Sub Machinegun
ステアー・ゾロターン
S1-100 短機関銃



全長 810mm
口径 9mm×19
装弾数 32発

SIG MKPS Sub Machinegun



SIG MKPS
Sub Machinegun
SIG MKPS
短機関銃



全長 825mm
口径 7.65mm×21
装弾数 30/40発

S1-100は、1920年代後半にスイスのゾロターン社により開発され、オーストリアのステアー社が生産した短機関銃で、1930年にオーストリア警察が9mm×23ステアー弾仕様をMP30として採用、1934年にはオーストリア陸軍が9mm×25モーゼル弾仕様をMP34として採用しました。1938年にドイツがオーストリアを併合すると、接収された多くのMP30やMP34が9mm×19弾仕様で改修されてMP34(i)の名称が与えられました。本品は9mm×19弾仕様で、着剣装置及びマガジン・ハウジングのチャージャー機能を備えないモデルです。レシーバーはボルト・ハンドルをロックする為の切り欠きが設けられた初期型で、本体上部のマニュアル・セーフティは備えていません。



マガジン・ハウジングは上下面に開口部が設けられていますが、チャージャー機能は備えていません。

SIG MKPSは、スイスのSIGが1937年に開発した短機関銃で、同一構造のMKMS短機関銃に比べて銃身長が短縮された警察向けモデルです。SIG MKMS及びMKPSは、それぞれ1933年に開発されたSIG MKMO及びその警察向け短縮モデルであるMKPOをベースに、製造コストを低減させる為に内部構造が簡略化されており、レシーバー遅延式ブローバック機構を廃してストレート・ブローバック式に変更されています。また、排莖の方向がレシーバー上面から右斜め上方へと変更されているのも特徴です。MKMOシリーズのマガジン・ハウジングは折り畳み式で、マガジン及びマガジン・ハウジングを前方に折り畳んで銃床前部に収納し、射撃時には容易に展開する事が可能となっていました。



MKPSのモデル名末尾のSは「Seitlich」に由来し、側面排莖(実際には右斜め上方)を意味します。

Furrer MP41/44 Sub Machinegun

Furrer MP41/44
Sub Machinegun
フラー MP41/44
短機関銃



全長 760mm
口径 9mm×19
装弾数 40発



FN M1949 (AFN49) Self-loading Rifle

FN M1949 (AFN49)
Self-loading Rifle
FN M1949 (AFN49)
自動小銃



全長 1,126mm
口径 .30-06
装弾数 10発



フラー MP41は、1941年にベルン造兵廠のアドルフ・フラー(Adolf Furrer)により開発され、スイス陸軍に採用された、スイス初の国産短機関銃です。同じくスイス軍用の Lmg 25 軽機関銃と同様、トグル・ジョイント式ショート・リコイル機構を備えています。改良型のフラー MP41/44では、銃床がベークライト製から木製に変更された他、トグル・ロックのカバーを溶接するなどの改良が加えられています。フラー MP41/44は高精度ではあったものの、重量がかさみ、複雑な内部機構のため製造コストが高額かつ汚れに弱いといった欠点が存在し、スイスでスミ短機関銃の国産化が進むと、第一線から引き上げられて要塞や補助部隊での運用に回されました。



改良型のフラー MP41/44では、トグル・ロックのカバーが外れないよう、溶接により固定されています。

1949年にFN社が発表し、1951年にベルギー軍制式となった自動小銃です。本銃の設計は、FN FAL自動小銃を設計した事で知られるベルギーの銃器設計者デュドネ・ジョゼフ・サイヴ(Dieudonné Joseph Saive)により行われました。FN M1949 自動小銃は、セミ・オートマチックのみのSAFN 49とセレクトイブ・ファイアのAFN 49の2モデルが生産されましたが、10連のボックス・マガジンではフル・オートマチック射撃には適しておらず、AFN 49の生産は少数のみにとどまりました。AFN 49ではトリガー・ガード左側面にセクター・レバーが設けられており、セクターを前方に入れたらセミ・オートマチック射撃、後方に入れたらフル・オートマチック射撃となります。



セミ・オートマチック位置に入れた状態でセクター・レバーのネジを締め込むと、セミ・オートマチック射撃位置で固定されます。

FN P90 Tactical LV Personal Defense Weapon



FN P90 Tactical LV Personal Defense Weapon
FN P90 タクティカル LV 短機関銃
全長 500mm
口径 5.7mm×28
装弾数 50発



ベルギーのFN社が開発したPDW(Personal Defense Weapon=個人防衛火器)とも呼ばれる特殊なカテゴリーの小火器で、ライフル弾を小型化したような特殊な弾薬を使用し、低反動でありながら高い貫通力を実現しています。そのコンセプトから他の銃とは異なる独特なデザインとなっており、グリップやセレクトナー等は人間工学に基づき設計されています。マガジンは本体上部に装着され、排莖は本体下部から行われます。FN P90 タクティカルは、リフレックス・サイトの代わりにピカティニー・レールを本体上部に備えたバリエーションで、フォア・グリップ前部に可視光レーザーもしくは赤外線レーザーユニットを内蔵したタイプは、それぞれLV及びLIRと呼ばれます。



フォア・グリップ前部には可視光レーザーユニットが内蔵されています。(加工によりレーザーの照射機能は除去されています)

Finnish Mosin Nagant M27 Rifle



Finnish Mosin Nagant
M27 Rifle
フィンランド モシナガン
M27 小銃



全長 1,190mm
口径 7.62mm×53R
装弾数 5発

1927年にフィンランド軍は、モシナガン M1891 歩兵銃を基に独自改良を加えたモデルとしてM27小銃を採用しました。M27小銃では銃身の短縮化及び重銃身化が行われており、フロント・サイトにガードが追加された他、フロント・バンドはノーズ・キャップ兼用となり、下部に着弾装置を備えたデザインに変更されました。また、ボルトのコネクター・バーに突起が追加され、レシーバー内に加工された溝と噛み合う構造へと改良されているのも特徴です。当初、銃床の強度不足から着弾直後の訓練時や射撃時に銃床が破損する問題が発生したため、1930年代半ばに生産が落ち込みましたが、その後強度不足を解消する為の改良が行われ、既存の銃床にも改修が施されました。



本銃体の薬室上面にはTikkakoski社のロゴ及び1934年製を示す年号が打刻されています。

Mosin Nagant M1891/30 Sniper Rifle

Mosin Nagant M1891/30
Sniper Rifle
モシンナガン M1891/30
狙撃銃 (PUスコープ付)



全長 1,232mm
口径 7.62mm×54R
装弾数 5発



Simonov SKS Carbine

Simonov SKS
Carbine
シモノフ SKS
カービン



全長 1,020mm
口径 7.62mm×39
装弾数 10発



モシンナガン M1891/30 小銃にPUスコープを搭載した狙撃銃です。1941年のドイツ軍侵攻時、ソ連で生産されていた狙撃銃はSVT 1940狙撃銃のみでしたが、独ソ戦の初期段階でソ連軍は多数の狙撃銃を失い、さらにSVT 1940狙撃銃の製造工場が疎開したため、狙撃銃の生産が一時ストップしました。このような状況下で、PUスコープを搭載したモシンナガン狙撃銃の生産が一時的に再開されましたが、スコープは既に生産停止となっており、マウントも戦時下の量産には適していませんでした。そのため、1942年から新型のPUスコープ用マウントの開発が進められ、D. M. Kochetovにより開発されたマウントを備えたモシンナガン狙撃銃が採用されました。



本銃体の銃室上面には、製造年を示す「1943」の刻印の他、イジュフスク造兵廠製を示す刻印が打刻されています。

中間弾薬である7.62mm×39弾を使用する新しい小火器システムの一環として、1949年に旧ソ連軍制式となった半自動小銃です。この小火器システムには、SKSの他にAK-47自動小銃やRPD軽機関銃が含まれていました。作動方式はショート・ストローク・ピストンを用いたガス圧利用方式で、ティルティング・ボルト方式の閉鎖機構を備えています。固定式の弾倉内には本体上部からストリップバー・クリップを用いて10発装填が可能で、弾倉底部はヒンジにより下方に開き、弾薬を容易に取り出す事が可能です。本銃は主にツラ造兵廠で1956年まで製造された他、イジュフスク造兵廠でも1952年から1955年まで生産が行われ、ソ連では最終的に約270万挺が製造されました。



本銃体のレシーバー・カバー上面には、ツラ造兵廠製を示す刻印の他、製造年を示す「1953」の刻印が打刻されています。

B-10 Recoilless Rifle



B-10 Recoilless Rifle
B-10 無反動砲



全長 1,850mm
口径 82mm
装弾数 単発

ZB39 Light Machinegun

ZB39 Light Machinegun
ZB39 軽機関銃



全長 1,155mm
口径 8mm×56R
装弾数 30発



1950年代初頭に開発され、1954年にソ連軍に採用された口径82mmの無反動砲です。砲身はライフルがない滑腔砲身で、砲の後端にはノズルベンチュリー部を備えた側面に開く尾栓が設けられており、後方から装填を行います。グリップやトリガーは砲の中間付近に配置され、照準はPBO-2光学照準器もしくはアイアン・サイトによって行われます。通常は車輪を備えた軽量の三脚に搭載され、3から4名の要員により運用されます。B-10用の主な弾薬としては、成形炸薬弾頭のMK-10及び破片弾頭のMO-10が存在し、推進薬は弾頭から後方に延びる尾部の周囲に巻きつける形で取り付けられ、飛行姿勢を安定させる為、固定式の尾翼(フィン)を尾部に備えています。



砲口下部付近には小さな車輪型の部品が取り付けられており、移動時に砲口が地面に触れないようになっています。

チェコスロバキアのズボロフ・ブルーノ社が製造し、ブルガリア軍が1939年に採用した軽機関銃で、外観はブレン Mk 1 軽機関銃及びその試作モデルであるZGB軽機関銃シリーズに非常に近いものとなっており、ブレン軽機関銃とは多くの部品に互換性があります。ZB39 軽機関銃はブレン軽機関銃と多くの点で共通した設計となっていますが、レシーバー前部右側面に削り出しのスイベル基部が設けられているなど細部に違いが見られます。高、使用弾薬は8mm×56R弾となっており、ブレン軽機関銃用のマガジンをZB39軽機関銃に使用する事は出来ません。ZB39軽機関銃の生産数は定かではありませんが、一説によると3,200挺程度がブルガリア軍により調達されたと言われています。



レシーバー上面にはブルガリア王国の国章及びボリス3世(在位1918-43年)の紋章が入っています。

写真はすべて作者撮影です。

AR-M1 Assault Rifle



AR-M1
Assault Rifle
ブルガリア
AR-M1 自動小銃



全長 937mm
口径 7.62mm×39
装弾数 30発

ZB26 Light Machinegun



ZB26
Light Machinegun
ZB26
軽機関銃



全長 1,165mm
口径 7.92mm×57
装弾数 20発

AR-M1は、ブルガリアのアーセナル社が主に輸出向けとして生産する、5.56mm×45弾もしくは7.62mm×39弾を使用するカラシニコフスタイルの自動小銃です。ブルガリアで国産されたAK-47であるAKKの流れを汲んだ発展型で、レシーバーは削り出しにより製作され、ハンドガードやバット・ストック、グリップ、マガジンはグラスファイバーにより強化された樹脂製となっています。銃身長は415mmで、銃口部のネジがAK-74と同様の24mm×1.5mmの正ネジのモデルの他、AKMと同様の14mm×1mm逆ネジのタイプが存在します。AR-M1のバリエーションとしては、本体下部に折り畳み可能なストックを備えたAR-M1Fと呼ばれるモデルが存在します。



本銃体の銃口部は24mm×1.5mmの正ネジとなっており、大型のフラッシュ・ suppressorを備えています。

1926年にチェコスロバキア陸軍が制式採用した軽機関銃です。作動方式はロングストローク・ピストンを用いたガス圧利用式で、ティルティング・ボルト式の閉鎖機構を備え、オープン・ボルト位置から射撃を行いました。給弾は本体上部に装着する20連マガジンから行われ、発射済み弾莖は本体下部へ排出されました。グリップ上部左側面にはセレクトターを備え、セミ/フル・オートマチック射撃の切り替えも可能でした。ZBシリーズは、その優秀性からルーマニアやトリアニア、ユーゴスラビアでも使用された他、イギリスのブレン軽機関銃もZBシリーズを基に開発されました。1930年のドイツによるチェコスロバキア占領後は、ドイツ陸軍もMG26(i)の名称でZB26軽機関銃を多数使用しました。



本銃体はブレン軽機関銃で、レシーバー上面には竜と戦う「型ゲオルギウス」及びギリシャ文字の刻印が打刻されています。

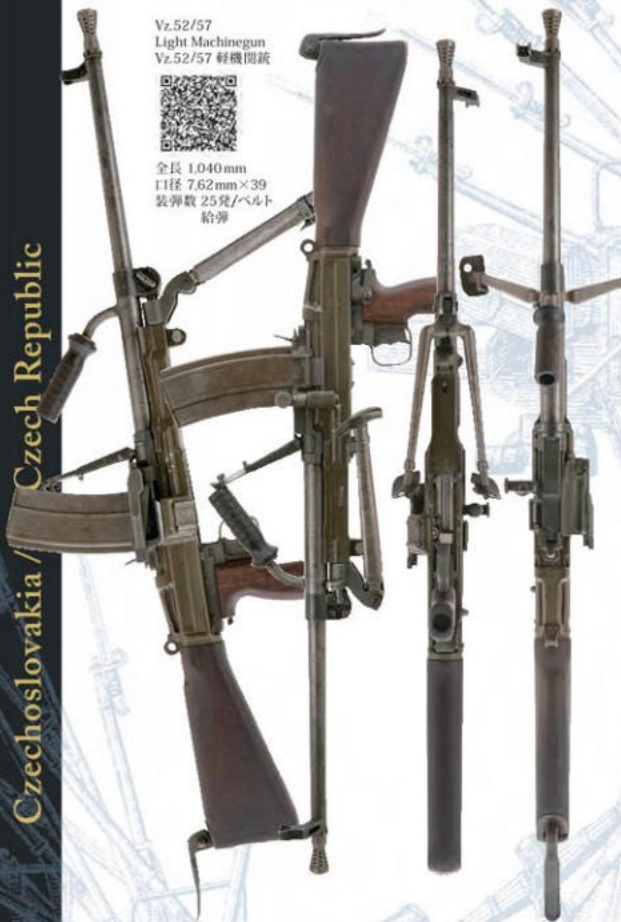
写真はすべて写真家によるものです。

Vz.52/57 Light Machinegun

Vz.52/57
Light Machinegun
Vz.52/57 軽機関銃



全長 1,040mm
口径 7.62mm×39
装弾数 25発/ベルト
給弾



ZB26の流れを汲む軽機関銃の発展型として開発され、1952年にチェコスロバキア軍制式となったVz.52 軽機関銃を基に、使用弾薬変更等の改良を加えたモデルです。ベースとなったVz.52 軽機関銃は、マガジンとベルトのどちらからでも給弾が可能で、グリップを前後させてコッキング操作を行う独特の機能を備えていた他、上下2段式のトリガーによりセミフルオートマチック射撃の撃ち分けを行いました。Vz.52 軽機関銃はチェコスロバキア独自の7.62mm×45弾を使用しましたが、1955年のチェコスロバキアのワルシャワ条約機構加盟に伴い、使用弾薬をソ連軍の制式弾薬であった7.62mm×39弾に変更したVz.52/57 軽機関銃が開発されました。



ベルト給弾機構とマガジン挿入孔は隣接して配置されており、いずれかの給弾方式を選択できる構造になっています。

Škorpion CZ91S Sub Machinegun



Škorpion CZ91S
Sub Machinegun
CZ91S スコーピオン
短機関銃



全長 520mm
(272mm)
口径 .380ACP
装弾数 12/24/30発

Vz.61 スコーピオン短機関銃をベースに開発された、民間向けセミオートマチックモデルです。1960年代のチェコスロバキアでは、Vz.61 短機関銃をベースに、Vz.64 (.380ACP)、Vz.65 (9mm×18)、Vz.68 (9mm×19)といった口径の異なる派生モデルが開発されましたが、いずれも大量生産には至りませんでした。その後、1990年代にチェコスロバキアでは、9mm×18 マカロフ弾を使用するVz.82や.380ACP弾を使用するVz.83、民間向け半自動モデルであるCZ91Sといったバリエーションが開発されました。9mm弾仕様のモデルは、マガジンがストレート形状となっているのが外観上の特徴です。



本体左側面にはメーカーロゴや「CZ 91 S.」のモデル名、「CAL. 9 Browning」の口径表示刻印が入っています。

写真はすべてすべて無断複製禁止です。

Yugoslav ZB30J Light Machinegun

Zastava M76 Sniper Rifle

Yugoslav ZB30J
Light Machinegun
ユーゴスラビア
ZB30J 軽機関銃



全長 1,100mm
口径 7.92mm×57
装弾数 20発

ZB30JはZB26に始まる軽機関銃のバリエーションの1つで、ユーゴスラビア王国向けのモデルです。ユーゴスラビアは1928年から1930年にかけて、チェコスロバキアからZB26を5,000挺輸入しましたが、ユーゴ製の弾薬を使用した際の作動性に問題が生じた他、ガスシリンダーが汚れやすい等の欠点があり、ZB30Jでは各部に改良が加えられました。ZB26に比べて長いフラッシュハイターや、銃身後部の鍵状のチェッカーリング加工がZB30Jの外観上の特徴です。1940年からはツァスタバの前身である Vojnotehnički zavod (VTZ) がZB30Jの国産化を行い、戦後はユーゴスラビア人民軍が接収したZB30Jを再整備して使用しました。



本機体のレシーバー上面にはユーゴスラビア王国の国章が打刻されています。

Zastava M76 Sniper Rifle
ツァスタバ M76 狙撃銃



全長 1,135mm
口径 7.92mm×57
装弾数 10発



旧ユーゴスラビアで1970年代半ばに開発された半自動式狙撃銃で、設計思想は旧ソ連のドラグノフ SVDと同様ですが、基本構造はAK系自動小銃を発展させたものとなっています。そのため、作動方式はSVDのようなショート・ストローク・ピストン方式ではなく、ロングストローク・ピストン方式となっています。使用弾薬についても、Kar. 98k小銃のユーゴ軍改良型であるM48小銃やMG42機関銃を国産化したM53機関銃と同じ7.92mm×57毛瑟弾となっています。レシーバーは削り出し製で、ストックはSVDのようなグリップ一体型ではなく、グリップとストックが独立した形状となっています。M76には4倍率のZRAK ON-M76スコープが標準で搭載されました。



本機体のレシーバー左側面には、製造年を示す「1993」の刻印の他、モデル名を示す「M.76」の刻印が打刻されています。

P84 Sub Machinegun



P84 Sub Machinegun
アルバニア P84 短機関銃



全長 650mm
(405mm)
口径 9mm×19
装弾数 20、32、40発



マガジンハウジング後部には、リング状のセーフティ及びマガジンリリース・レバーが設けられています。

Israeli FAL Self-loading Rifle, Late Type



Israeli FAL
Self-loading Rifle
Late Type
イスラエル FAL
自動小銃 (後期型)



全長 1,078mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



マガジンハウジング右側面には、イスラエル国防軍(IDF)のエンブレムやヘブライ語の刻印が打刻されています。

第二次世界大戦後、アルバニアは独自の共産主義体制を採用し、1976年に中国と断絶した結果、国際社会での孤立を深めていました。本銃はそのような情勢下において、アルバニアで設計・国産化された短機関銃です。バレル・ジャケット及びレシーバーはパイプ状で、プレス成形されたグリップがレシーバー後部下方から斜めに取り付けられています。伸縮式ワイヤーストックに取り付けられたパッド・プレートは、ストックを縮めた状態でグリップ後部に覆いかぶさります。トリガー・ガードは設けられておらず、マガジンハウジングを握った手の親指でマガジンハウジング後方のリングを前方に引くとセーフティが解除されます。本銃には、第二次世界大戦中のイタリヤ軍用短機関銃共通のマガジンを流用可能です。

第一次中東戦争後、イスラエル軍はリー・エンフィールドやKar.98k等の種多な小銃を更新する為、ベルギーで開発されたFN FAL自動小銃を採用しました。イスラエル軍用FALのハンドガードは、オリジナルのベルギー製FALとは大きく形状が異なり、後方が太い円筒状となっているのが特徴です。尚、ハンドガードは前期型では全木製、後期型では前半部が金属製で後半部が木製となっています。また、後期型ではレシーバーやフロント・サイト・ガードの形状にも改良が加えられています。イスラエル軍では、通常のFAL自動小銃の他、二脚やヘビー・バレルを備えた分隊支援火器モデルのFALOが自国開発のUZI短機関銃と共に配備され、多くの紛争で使用されました。

Galil SAR Assault Rifle



Galil SAR
Assault Rifle
ガリル SAR
自動小銃

全長 852mm
(615mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35/50発

Negev Light Machinegun



Negev Light Machinegun
ネゲヴ 軽機関銃

全長 1,018mm(779mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35/50発またはベルト給弾

ガリル自動小銃は、イスラエル国防軍で使用されていた FN FAL 自動小銃を更新するべく、フィンランドで開発されたバルメット Rk.62 をベースに、第三次中東戦争の実戦経験に基づいた独自改良を行い国産化した自動小銃です。ガリル SAR は、スタンダード・モデルであるガリル ARM や AR に比べて短い 13.1 インチの銃身を備えたバリエーションで、銃身の短縮に伴い、ガス・ピストンやガス・チューブが短縮化されている他、ガス・ブロックの形状も異なります。ガリル SAR はイスラエル国防軍で最も長く運用されたバリエーションで、2004 年前後まで機甲部隊や砲兵部隊等で使用されました。ガリル ARM や AR と同様に、ガリル SAR にも 7.62mm×51 弾仕様が存在します。



銃身長の短縮にともない、ガス・ブロックの形状もガリル ARM や AR から変更されています。本品は着弾弾を備えたタイプです。



イスラエル・ミリタリー・インダストリーズ (IMI, 現:イスラエル・ウェポン・インダストリーズ (IWI)) により開発され、1997 年にイスラエル国防軍 (IDF) に採用された、5.56mm×45 NATO 弾を使用する軽機関銃です。作動方式はロング・ストローク・ピストンを用いたガス圧利用方式で、オープン・ボルト位置から射撃を行います。FN MINIMI と同様に、ベルト給弾の他、箱型弾倉からの給弾を可能としており、ガリル用 35 連マガジンの他、アダプターを介して STANAG マガジンにも対応しています。また、セミ・オートマチック射撃が可能である点も特徴です。2002 年頃には、ネゲヴは IDF における標準的な軽機関銃として使用されるようになりました。



本品には STANAG マガジンのアダプターが取り付けられています。

Congolese FN FAL Self-loading Rifle

Congolese FN FAL
Self-loading Rifle
コンゴ FN FAL
自動小銃



全長 1,053mm
口径 7.62mm×51
装弾数 20発



Vektor R5 Assault Rifle

Vektor R5 Assault Rifle
ベクター R5 自動小銃



全長 882mm (616mm)
口径 5.56mm×45
装弾数 35/50発



ベルギー領コンゴ(現:コンゴ民主共和国)は、1908年から1960年までアフリカに存在したベルギーの植民地で、ベルギーがFN49自動小銃の後継として1954年にFN FAL自動小銃を採用すると、コンゴでも本国と同様にFN FALが採用されました。ベルギー領コンゴで使用されたFN FALのマガジン・ハウジングには、ベルギーの国家的象徴であるライオンと王冠を組み合わせた紋章の他、植民地軍である「Force Publique (公安軍)」を示す「F.P.」の刻印が打刻されています。1960年のコンゴ独立直後に発生したコンゴ動乱において、公安軍が保有していたFN FALを含む兵器は両陣営の手に渡り、内戦終結後は中央アフリカ各地に散逸しました。



本個体にはライオンの紋章や「F.P.」の刻印の他、コンゴ独立前年の1959年を示す刻印が入っています。

ベクター R4シリーズは、南アフリカ軍で採用されていたFN FALのライセンス生産品であるベクター R1シリーズの後継として、南アフリカでライセンス生産されたガリル自動小銃です。ベクター R4シリーズの基本構造はガリル自動小銃と同様ですが、南アフリカ軍兵士の体格に合わせて、ストックがガリルより延長されています。銃身長18.1インチのベクター R4に対して、ベクター R5は銃身長を13.1インチに短縮したモデルで、折り畳み式の二脚が廃された他、フラッシュ・ハイダーはライフル・グレネードに非対応となりました。尚、セレクト・ファイアのベクター R5に対して、射撃機能をセミ・オートマチックのみに限定したベクター LM5と呼ばれるモデルも存在します。



ベクター R5は、オリジナルのガリル SARに比べてフロント・サイト・ガードが大型化されている他、ガス・チューブ先端の形状も異なっています。

写真の武器はすべて複製品です。

Mukden Type 13 Infantry Rifle



Mukden Type 13
Infantry Rifle
奉天十三式
歩兵銃



全長 1,249mm
口徑 7.92mm×57
装弾数 5発

Norinco 84S-2 Self-loading Rifle



Norinco 84S-2
Self-loading Rifle
ノリンコ 84S-2
自動小銃



全長 902mm
(678mm)
口徑 5.56mm×45
装弾数 30発

中華民国政府時代に、奉天派軍閥の張作霖の指揮下にあった東三省兵工廠で1924年(中華民国13年)に開発された歩兵銃です。薬室上部に設けられたガス排出孔や、着脱可能なスライド式の遊底覆といった有坂系小銃の特徴が見られる一方、セーフティ形状や弾倉底板の構造、着剣装置の形状はモーゼル系小銃に類似しています。また、フロント・ソッドにはバレード・フックを備え、銃把後方の銃床下部にはクイック・リリース式のスリング取付部を備えています。本銃は約14万挺が生産されて奉天派の主力小銃となり、1931年に満洲事変が勃発すると、関東軍が本銃を72,679挺国産しました。満洲国成立後、それらの既存の十三式歩兵銃は満洲国軍に引き継がれ使用されました。



薬室上部にはガス排出孔が設けられ、東三省兵工廠を示す刻印が打刻されています。

1980年代半ばに、中国北方工業公司(ノリンコ)が主に米国市場での販売拡大を狙って、プレス製シーバーの56式自動小銃をベースに、使用弾薬を5.56mm×45弾に変更して開発した自動小銃です。民間向けとして製造されたため、射撃機能はセミオートマチック射撃のみとなっています。ノリンコ84Sは使用弾薬の変更に伴い、マガジンのカーブが56式に比べて緩くなっている他、銃口部にバード・ケージ型のフラッシュ・サプレッサーを備えているのが外観上の特徴です。主な輸出先は米国でしたが、1989年に正当なスポーツ用途ではないとみなされた外国製半自動小銃の輸入が禁止された事により、米国へ正規に輸入が行われたのは1988年の1年間のみであったと言われています。



ノリンコ84S-2は、56-2式自動小銃と同様のサイド・フォールディングストックを備えたバリエーションです。

Norinco Type 56-2 Assault Rifle



Norinco Type 56-2
Assault Rifle
ノリンコ 56-2 式
自動小銃



全長 873mm
(651mm)
口径 7.62mm×39
装弾数 30発

中国北方工業公司（ノリンコ）により製造された56式自動小銃のバリエーションの一つで、プレス製レシーバーにクリーニング・キットを収納可能な独自のサイド・フォールディング・ストックを備えたモデルです。プレス製レシーバーの56式自動小銃は、ソ連製のAKM自動小銃と異なり、レシーバー・カバーがリブのないタイプとなっている他、リア・サイトの最大射程もAK-47と同じ800mまでとなっています。また、フロント・サイト・ガードの上部が閉じた特徴的な形状となっているのも特徴です。ノリンコ56-2式自動小銃のバリエーションとしては、射撃機能をセミ・オートマチック射撃のみに限定した民間輸出向けモデルである56S-2自動小銃が存在します。



折り畳みのハンドガードやグリップの他、クリーニング・キットを収納可能なサイド・フォールディング・ストックを備えています。

KPV Heavy Machinegun



KPV Heavy
Machinegun
KPV 重機関銃



全長 2,005mm
口径 14.5mm×114
装弾数 ベルト給弾

第二次世界大戦中の1944年にS.V.ウラジミロフの主導で開発が始まり、1949年に採用された重機関銃です。連射能力と徹甲能力を兼ね備えており、徹甲焼夷弾や高性能焼夷弾、曳光弾を用いる事で、軽装甲目標に対する攻撃や短距離での対空戦闘に適していました。作動はショート・リコイル方式で、ボルト・カラーが回転する方式の閉鎖機構を備えています。給弾は非分離式金属ベルトを用い、左右どちらからの給弾にも対応しています。排莖は歩兵用のKPVでは本体下部から、車載機関銃型の改良モデルであるKPVでは排莖用のチューブを通して前方から行われます。KPVは1950年頃から量産が開始され、車輪付きマウントや車装/二連装/四連装の対空マウント等に搭載して運用されました。



本体はレシーバー上面に三角と46の数字を組み合わせた刻印が入っており、中国で生産された品と考えられます。

Japanese Matchlock Cavalry Pistol w/ Bronze Barrel

「馬上銃」とは、馬上での片手射撃用に作られた小型の火縄銃です。本品はやや小振りながら、重厚な太身の青銅製銃身を備えています。銃身は丸銃身形状で、上面が平らな「表一角」スタイルを採用しています。銃床は質実剛健で、真鍮板により「丸二三ツ鱗紋」の家紋の装飾が施されており、各部品も真鍮製で統一されています。両側には煙返しを備え、引金周囲の金具は珍しい「松皮菱」の形状となっています。銃床後端の「象の鼻」と呼ばれる形状や、背割り後端の金具が火縄消し穴となっている点も特徴的です。馬上での操作には高度な技量が必要で、所有者は高位の武士であったと推察されます。また、青銅製銃身と真鍮製機関部の組み合わせから、海軍や水軍の指揮官が使用した可能性も考えられます。



本品の元目当は、火縄よりも後方の銃身後端に取り付けられた珍しい配列となっています。元目当は筋割で、前部が段付き形状となっています。



Japanese Matchlock Cavalry Pistol
w/ Bronze Barrel
火縄銃 四匁五分馬上銃 青銅製銃身
「丸二三ツ鱗紋」(無銘)



全長 328mm
口径 14mm
装弾数 単発

U.S. Model 1836 Flintlock Pistol by Robert Johnson

コネチカット州ミドルタウンに所在していたロバート・ジョンソン(Robert Johnson)社が1836年頃から1844年頃にかけて製造した、.54口径の火打石式(フリントロック式)軍用拳銃です。M1826の改良型であるM1836は、米国政府との契約に基づいて製造された最後のフリントロック式軍用拳銃で、鉄製のバレルバンド左側面のストラップがサイド・プレートまで延びているのが外観上の特徴です。M1836火打石式軍用拳銃は、米墨戦争(1846年-1848年)において米陸軍の標準装備として使用され、1850年代には多くが管打式(パーカッション式)へと改造されて、南北戦争(1861年-1865年)でも使用されました。



本品の銃床左側面には、米陸軍の検査官刻印(Cartouche=カートゥーン)が打刻されています。



US Model 1836 Flintlock Pistol
by Robert Johnson
US M1836 R. Johnson社製
火打石式軍用拳銃



全長 356mm
口径 .54 cal.
装弾数 単発

U.S. Colt Model 1848 Dragoon Revolver, Engraved 3rd Model

コルトウォーカーの後継として1848年に発売された、.44口径の管打式リボルバーです。1847年に登場したコルトウォーカーは、銃身長が9インチと極めて大型かつ重量過大で、シリンダーの破裂事故の頻発やローディングレバーの固定機構が不十分であるといった欠点もありました。その後、ホイットニー・ビル・ハートフォード・ドラグーンと呼ばれる過渡期の短縮改良型を経て、M1848ドラグーンではシリンダーが短縮されて装填可能量が減らされた他、ローディングレバーに固定用ラッチが追加されました。1851年から1861年まで製造された3rd Modelでは、トリガーガード後部が丸みを帯びた形状となり、銃身長は7 1/2インチの他、8インチの個体も存在します。



銃身基部上面には、
メーカーアドレスを示す
「ADDRESS SAM'L COLT
NEW-YORK CITY」の刻
印が入っています。

US Colt Model 1848 Dragoon
Revolver, Engraved 3rd Model
US コルト M1848 ドラグーン
リボルバー 3rd Model
(彫刻人、象牙グリップ)



全長 379mm
口径 .44 cal.
装弾数 6発

U.S. Robbins & Lawrence Pepperbox

米国のロビンス & ローレンス社より、1851年から1854年にかけて約7,000挺製造された、管打式(パーカッション式)のペッパーボックスピストルです。撃発機構は、ジョージ・レナードが1849年に取得した特許に基づいており、回転しない固定式銃身に対して、内蔵のL字型ハンマーがトリガーを引くたびに72度ずつ回転し、順番にパーカッション・キャップを撃発しました。また、二分割式のヒンジ付き銃身により、装填操作も容易でした。特殊な構造のリングトリガーは、軽いトリガー・プルを実現しており、独自のデコッキング機構と組み合わせる事で、良好な操作性と高い安全性を併せ持っていました。銃身はグリップに近い低い位置に配されており、狙い易さも追求されています。



本体上部のラッチ・レ
バーを操作すると、銃身
が前方にチグダウンし、
パーカッション・キャ
ップ及び内蔵ハンマー
が露出します。

US Robbins & Lawrence
Pepperbox
US ロビンス & ローレンス
ペッパーボックス



全長 185mm
口径 .28cal.
装弾数 5発

U.S. Smith & Wesson Volcanic No.2 Pistol, 8 in. Barrel

米国のスミス&ウェッソン(S&W)社が製造したレバー・アクション式の連発拳銃で、「ボルカニック(Volcanic)」という愛称は、当時「火山の噴火のような連射速度」と評された事に由来します。ホーレス・スミスとダニエル・ウェッソンは、ウォルター・ハントが開発したロケット・ボール弾薬及びルイス・ジェニングスが開発した連発銃の改良に取り組み、改良された一体型弾薬とトルク・リンク機構を採用したレバー・アクション式連発銃の設計に関して、1854年に特許を取得しました。同年にはハントとジェニングスの特許を継承する形で、スミス&ウェッソンの名を冠した最初の会社が設立され、1854年から1855年にかけて初期のレバー・アクション式銃器を約1,700挺製造しました。



銃身上面には、「PATENT SMITH & WESSON NORWICH CT.」の刻印が三行にわたって入っています。



US Smith & Wesson
Volcanic No.2 Pistol
US S&W社製 ボルカニック
No.2 ピistol



全長 365mm
口径 .41cal.
装弾数 10発

U.S. New Haven Arms Volcanic No.2 Pistol, 6 in. Barrel

1854年に設立されたS&W社は、僅か1年で経営難に陥り、資産をオリバー・ウィンチェスターらの投資グループに売却しました。この投資グループは、1855年7月にボルカニック・リピーティング・アームズ社を設立し、当初は旧S&W社の在庫部品を使用したボルカニック・ピistolの組み立てを行い、その後砲金製フレームを備えたボルカニック・ピistol及びピistol・カーブンの製造を行いました。1857年にボルカニック社は破産を宣言しましたが、その資産はオリバー・ウィンチェスターに引き継がれ、同年5月にニューヘイブン・アームズ社が設立されました。同社が製造したボルカニック・ピistolには、.31口径のNo.1及び.41口径のNo.2という2種類のモデルが存在しました。



弾薬の装填方法はヘンリーライフルと同様で、フォロワーを銃口側にスライドさせた後、弾倉チューブ前部を回転させて開き、装填を行います。



US New Haven Arms
Volcanic No.2 Pistol
US New Haven Arms社製
ボルカニック No.2 ピistol



全長 326mm
口径 .41cal.
装弾数 8発

U.S. Starr Model 1858 Army Double Action Revolver

1858年から1860年頃にかけて米国スター社が製造した、特殊なダブルアクション機構を備えた管打式拳銃です。通常の形状のトリガーはハンマーをコックする機能のみを担い、ハンマーのリリースは、トリガーガード内側後部に配置された小型トリガー（リアル・トリガー）を押すことにより行われます。ダブルアクション・モードとシングルアクション・モード（正確には「セルフ・コッキング・モード」）の切り替えは、トリガー背面のラグを上下させる事で行います。スターM1858には、.44口径のアーミー・モデルと、.361口径のネイビー・モデルの2種が存在し、アーミー・モデルは約23,000挺が生産され、そのうち21,000挺が北軍に納入されました。



フレーム左側面には、メーカー名を示す「STARR ARMS, CO. NEW YORK」の刻印が入っています。



US Starr Model 1858 Army
Double Action Revolver
US スター M1858 アーミー
ダブルアクションリボルバー



全長 322mm
口径 .44cal.
装弾数 6発

U.S. Colt Model 1860 Army Revolver New York Style Engraved

コルト M1860 アーミー リボルバーは、1860年から1873年まで製造された .44口径の管打式リボルバーで、M1851 ネビーを基にシリンダー前部を強化して大口徑に対応した他、ラウンド・バレルを採用しているのが特徴です。総生産数約20万挺の内、12万挺以上が米国政府に納入され、南北戦争中にはM1851等とともに広く使用されました。本品はフレーム側面にショルダー・ストック取り付け用スクリューを備えた軍用向けモデルです。本品にはルイス・D・ニムシュケらに代表される19世紀後半の職人たちによって発展した装飾技法である「New York Style」と呼ばれる、華麗なスクロールと点描を組み合わせたエングレービングが施されています。



フレームやシリンダーに施される彫刻は、「New York Style」と呼ばれる、美しいスクロールの取れた対称的な構成となっています。



US Colt Model 1860 Army Revolver
New York Style Engraved
US コルト M1860 アーミー リボルバー
(4 Screw Model, 彫刻入)



全長 355mm
口径 .44cal.
装弾数 6発

U.S. Savage Model 1861 Navy Revolver

コネチカット州に所在したサベージリボルビングファイアームズ社が1860年から1862年にかけて製造した、大型の管打式リボルバーです。本銃はサベージ&ノース社が製造したフィギュア8ネービーリボルバーの発展型で、ヘンリー・S・ノース(Henry S. North)の特許に基づくコッキング・メカニズムにより作動します。これはトリガー下部に設けられたコッキング・レバーを用いてハンマーのコッキング及びシリンダーの回転操作を行うものです。本銃は生産された約2万挺の内、半数以上が合衆国政府(北軍)に納入されました。北軍納入分以外については一般市場でも販売されましたが、その多くを南軍が購入し、南北戦争中は南北両軍で使用されました。



フレーム上面には、メーカーを示す「SAVAGE R.F.A. Co. MIDDLETOWN, CT.」の刻印に加えて、ヘンリー・S・ノースの特許刻印が入っています。



US Savage Model 1861
Navy Revolver
US サベージ M1861
ネービー リボルバー



全長 376mm
口径 .36cal.
装弾数 6発

U.S. Whitney Navy Revolver 2nd Model (4th Type)

コネチカット州ニューヘイブンのホイットニー社により1850年代後半から製造された、.36口径6連発の管打式(バカッション式)リボルバーで、同時代のレミントン社製リボルバーと同様、一体型のソリッド・フレームを採用していました。ローディング・レバーと一体となったシリンダー・軸は、フレーム前部左側面のノブを回すとロックが解除され、前方に引き抜く事が可能です。ホイットニー ネービー リボルバーは、製造時期によって1st Modelと2nd Modelに大別され、さらに1st Modelには4種類、2nd Modelには5(もしくは6)種類のバリエーションが存在します。本銃は合衆国陸軍および海軍に供給された他、一部は南部諸州にも流れ、南北戦争で使用されました。



銃身上面には、メーカー名を示す「E. WHITNEY N. HAVEN」の刻印が二行にわたって入っています。



US Whitney Navy Revolver
2nd Model (4th Type)
US ホワイトニー ネービー リボルバー
2nd Model (4th Type)



全長 333mm
口径 .36cal.
装弾数 6発

U.S. Remington-Rider Double Action Belt Revolver

ジョセフ・ライダーの патентに基づき、米国レミントン社が製造した、36口径の管打式ダブル・アクションリボルバーです。南北戦争中、レミントン社は戦争終結後の軍用リボルバーの需要減少を見越し、民間市場向け銃器の開発を進めました。同社は従来のレミントン・ライダー ポケットリボルバーを拡大し、ベルト・ホルスターやコートのポケットに収められる携帯性を維持しつつ、軍用と同じ威力を備えた、36口径のレミントン・ライダー ダブル・アクション ニュー・モデルベルトリボルバーを1863年に発表しました。しかしながら、当時はシングル・アクション式リボルバーが軍用・民間市場で圧倒的に支持されていたため、その総生産数は僅か3,000～5,000挺程度に留まりました。



1865年頃までに生産された最初期の生産品では、シリンダー表面にフルート（溝）が施されており、その後円筒形シリンダーに変更されました。

US Remington-Rider
Double Action
Belt Revolver
US レミントン・ライダー
ダブル・アクション
ベルトリボルバー



全長 294mm
口径 .36cal.
装弾数 6発

U.S. Rogers & Spencer Army Model Revolver

1864年に米国陸軍省から注文を受けて、ニューヨーク州のロジャース & スペンサー社で製造された、管打式（ハーカッション式）のシングル・アクションリボルバーです。本モデルは、1862年にオースティン・T・フリーマンが取得したパテントを基に改良を加えて開発され、レミントン社製リボルバーに類似したソリッド・フレームを備えています。アーミー・モデルと呼ばれる、44口径の6連発モデル以外にバリエーションは存在せず、ロジャース & スペンサー社において1864年頃から1865年頃にかけて約5,800挺が製造されました。その内、5,000挺が1865年に陸軍省に納入されましたが、南北戦争中に実戦に投入される事はなかったと言われています。



ソリッド・フレームの上には、「ROGERS & SPENCER」及び「UTICA N.Y.」の刻印が入っています。



US Rogers & Spencer
Army Model Revolver
US ロジャース & スペンサー
アーミー・モデル リボルバー



全長 345mm
口径 .44cal.
装弾数 6発

U.S. Colt Model 1855 Revolving Shotgun .75 Caliber Sporting Model



コルト M1855 リボルビング・ライフルは、コルト社が1855年から1864年頃にかけて製造した初期の連発式小銃で、「コルトニュー・モデル リボルビング・ライフル」とも呼ばれます。機構的にはコルト M1855 サイド・ハンマーポケット・リボルバーを拡大したもので、15インチから30インチまでの銃身長の異なるライフル及びカービン・モデルが、軍用もしくはスポーツ用として製造されました。また、口径についても複数のバリエーションが存在します。さらに、スポーツ用・モデルの派生型として、60口径(20GA)及び.75口径(10 GA)のリボルビング・ショットガンも開発され、1860年から1863年頃にかけて約1,100挺が製造されました。

US Colt Model 1855 Revolving Shotgun
.75 Caliber Sporting Model
US コルト M1855 リボルビング・ショットガン
(.75口径 スポーツ用 ハーフ・ストック・モデル)



フレーム上面には、メーカー名を示す「COL. COLT HARTFORD CT. U.S.A.」の刻印が入っています。



全長 1,260mm
口径 .75cal.
装弾数 5発

U.S. New Haven Arms Henry Model 1860 Rifle



1860年にニューヘイブン・アームズ社の工場監督者であったベンジャミン・タイラー・ヘンリー (Benjamin Tyler Henry) により開発された、レバー・アクション式の連発銃です。本銃は、ボルカニック連発銃の設計をさらに発展させたもので、使用弾薬がライフル用として十分な威力を備えた.44口径のリムファイアカートリッジに変更された他、弾薬変更に合わせてフレームや薬室が拡大・強化され、撃針やボルト、発射済み薬莢の排出機構等にも改良が加えられました。最終的にはニューヘイブン・アームズ社におけるボルカニック連発銃及びボルカニック弾の製造は終了し、同社の全生産能力はヘンリー・ライフル及びその弾薬に集中する事となりました。

US New Haven Arms Henry Model 1860 Rifle
US New Haven Arms 社製 ヘンリー M1860 ライフル



銃身上面には、ヘンリーのバテント刻印及びニューヘイブン・アームズ社のメーカー・アドレス刻印が二行にわたって入っています。



全長 1,108mm
口径 .44cal.
装弾数 16発

U.S. Spencer Model 1865 Carbine w/ Engraving of the Savoyard Spain



レシーバー上面の「1871年1月15日」を意味する彫刻。

スペンサー連発銃は、クリストファー・スペンサーが開発した7連発のレバーアクション式小銃です。南北戦争で主に北軍が使用したスペンサー M1860は、22インチ銃身を備えた、.56-56 Spencer弾を使用するモデルでしたが、M1865は20インチ銃身となり、口径も.50口径に変更されました。本品のレシーバー右側面には、1861年にイタリア王家となった名門であるサヴォイア家の紋章をモチーフにした彫刻が施されています。レシーバー上面にはスペイン語で「1871年1月15日」を意味する彫刻が入っていますが、これはサヴォイア家出身のスペイン国王アマデオ1世が議会で立憲君主制を宣誓した日であり、本品もこれを記念して製作された可能性が高いと考えられます。

US Spencer Model 1865 Carbine
w/ Engraving of the Savoyard Spain
US スペンサー M1865 カービン
(サヴォイア朝スペイン王国彫刻入)



レシーバー右側面には、十字が描かれた盾と王冠を組み合わせたサヴォイア家の紋章をモチーフにした彫刻が施されています。



全長 940mm
口径 .50cal.
装弾数 7発

U.S. Remington Percussion Revolving Rifle, .36 Caliber



「壬申六八三取島縣」刻印。

米国レミントン社が民間の狩猟向けとして製造した、回転式の弾倉を備えた官打式(パーカッション式)のライフルです。基本構造は同社製のニューモデルリボルバーとほぼ同様ですが、フレームは専用設計となっており、リボルバーと部品の互換性はありません。官打式のレミントンリボルビングライフルには、.36口径のモデルの他、少数ながら.44口径のモデルが存在します。本銃は構造上の限界により比較的低威力であったことや、ウィンチェスター社が同時期に新型のレバーアクション式連発銃を発売した事、当時レミントン社がローリングブロックライフルの生産に注力していた事などが原因で、生産数は1,000挺以下(約800挺程度)に留まったと言われています。

US Remington Percussion
Revolving Rifle, .36 Caliber
US レミントンリボルビングライフル



洋白製と思われるスクロール形状のトリガーガードは、3本のネジ(下面)で本体フレーム側面から固定する1本により固定されるタイプです。



全長 1,152mm
口径 .36cal.
装弾数 6発

Prussian Dreyse M1850 Needle-fire Revolver

プロイセンの銃工ヨハン・ニコラウス・フォン・ドライゼ (Johann Nicolaus von Dreyse, 1787-1867) によって開発され、1850年にM1850としてプロイセン軍に採用されたリボルバーです。針状の長い撃針をダブル・アクションで前後にスライドさせ、シリンダー内の紙製薬莖を貫通して内部の雷管を撃発するという、世界的にも非常に珍しい機構を備えていました。ドライゼ M1850 ニードル・ファイアリボルバーは、士官や砲兵などの自衛用として採用されましたが、同じくドライゼが開発した、世界初の実用的なボルト・アクション式小銃であるドライゼ M1841 歩兵銃に比べ、そのインパクトは限定的で、歩兵銃の名声に隠れる形となりました。



フレーム上面には、メーカー名と工場所在地であるドライゼ・ゾムメルダの地名を示す「DREYSE SOMMERDA」の刻印が入っています。



Prussian Dreyse M1850
Needle-fire Revolver
プロイセンドライゼ M1850
ニードル・ファイア リボルバー



全長 312mm
口径 9mm
装弾数 6発

Prussian Dreyse M1862 Infantry Rifle



プロイセン軍が1840年に採用した、ニードル・ファイア式撃発機構を備えたボルト・アクション式小銃であるドライゼ M1841 軽歩兵銃の改良型で、1862年に採用されました。M1862では製造時の精度が高められ、発射ガスが漏れ低減および部品の互換性向上が図られました。しかし、普仏戦争(1870年-1871年)では、フランス軍がより高性能なシャスポー銃を投入した事により、プロイセンでも既存のドライゼ小銃の性能を強化する為、ボルト・ヘッドの改修が行われました。

Prussian Dreyse M1862 Infantry Rifle
プロイセンドライゼ M1862 歩兵銃



本品はドライゼ社製で、機関部には工場所在地を示す「Sommerda」及び「Nikolaus von Dreyse」の刻印が確認出来ます。



全長 1,342mm
口径 15mm
装弾数 単発

Cased Pair of English Percussion Pocket Pistols by Collins

1830年代から1850年代頃に英国の銃器商ジェームズ・コリンズ社により製造された、管打式（バーカッション式）の単発ピストルで、ポケット・ピストルやトラバース・ピストルと呼ばれた高級品です。コリンズ社はロンドンの一等地に店舗を構え、高級銃器の製造及び銃器の保管業を行っていました。本品は撃発機構が箱型の本体内部に収められたボックス・ロック式で、ハンマーは本体中央に配置されたセンター・ハンマー式となっています。ベルト・フックやスイベル式のラム・ロッドを装備した、英国製らしい実用的な設計で、携帯性を考慮し、トリガーは折り畳み式となっています。グリップは19世紀に流行した全体に丸みのあるバグタイプと呼ばれる形状で、携帯性とデザイン性に優れています。



本品は本箱入りの2挺セットで、いずれの銃にも、グリップ後部に内蔵形のプレートが取り付けられており、家紋と思われるライオンを意匠化した紋章が入っています。

Cased Pair of English Percussion Pocket Pistols by Collins
英国 Collins 社製 管打式ポケット拳銃
二挺セット、本箱&付属品付



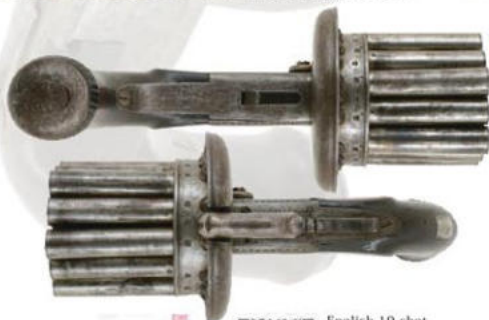
全長 192mm
口径 13mm
装弾数 単発

English 19-shot Bar Hammer Pepperbox by Thomas Naylor

英国シェフィールドのトーマス・ネイラー (Thomas Naylor) 社が1850年代頃に製造した、19本の銃身を持つ管打式（バーカッション式）のペッパーボックス拳銃です。銃身は全てターン・オフ・バレルと呼ばれるねじ込み式となっており、個別に取り外す事が可能です。シンダーはハンマーとは連動しておらず、射撃のたびに手動で回転させる構造ですが、回転方向は一方のみで、ニッブルごとに明確なクリック感があるため、バーカッション・ニッブルを正しい位置に確実に合わせる事が可能です。ハンマー後方のフレーム上部にはスライド式のセーフティを備えており、ハーフ・コック状態でセーフティを前進させる事でハンマーがロックされ、安全に換行する事が可能です。



銃身取り付け基部には、銃身の番号と対応する位置に同じ番号が打刻されている他、バーミンガム・フルーフ・ハウスの前田が二種類交互に打刻されています。



English 19-shot Bar Hammer Pepperbox by Thomas Naylor
英国 Thomas Naylor 社製
19連発 ペッパーボックス



全長 199mm
口径 9mm
装弾数 19発



English Deane, Adams & Deane Model 1851 Self-cocking Navy Revolver

英国のロバート・アダムス(Robert Adams)の特許に基づいて製造された、管打式(バールカッション式)のダブル・アクション・リボルバーです。アダムスは1851年に、現在でいうダブル・アクション・オンリーに相当する「セルフ・コッキング」と呼ばれるトリガー・メカニズムに関する特許を取得しました。この機構はアダムス M1851 セルフ・コッキング・リボルバーに組み込まれましたが、トリガー・プルが重く、また初期生産品ではローディング・レバーを備えていなかったため、携行時には別途ローディング・ツールを持ち運ぶ必要がありました。本銃のフレームは、銃身と単一の鋼製ブロックから削り出された、一体型のソリッド・フレーム構造となっています。



アダムス・リボルバーは、1853年から1856年にかけて、ロンドンのデーン・アダムス＆デーン(Deane, Adams & Deane)社との提携の下で製造されました。

English Deane
Adams & Deane Model 1851
Self-cocking Navy Revolver
英国 デーン・アダムス M1851
セルフ・コッキング ネビー・リボルバー



全長 262mm
口径 12mm
装弾数 5発

Cased English 6-shot Pinfire Fist Pistol w/ London Patent

フィスト・ピistolは、ベッカーボックスから発展した特殊な形状のリボルバーの一種で、その名の通り「鉄拳」に似た外観を持ちます。また、ナックル・ガードやナイフを備えた、文字通りの「鉄拳銃」が製作された例も存在しています。フィスト・ピistolは、各国で様々な装填機構が考案され、それらに関して多数の特許が取得されました。本品も例外ではなく、ピン・ファイア・カートリッジを使用する独自の装填システムを備えています。本体前方左側面にあるレバーを90度下方に回す事でシリンドラーのロックが解除され、容易に本体から取り外して装填する事が可能です。フィスト・ピistolは、ベルギーやフランスをはじめとするヨーロッパ大陸で多く製造されましたが、本品は珍しい英国製のモデルです。



専用木箱、オイル・ポトル、クリーニング・ロッド、ドライバーが付属します。



フレーム右側面に打刻された「PATENT」刻印の右横にある5桁の数字は、パテント番号ではなくシリアルNo.を示しています。

Cased English 6-shot Pinfire
Fist Pistol w/ London Patent
英国製 ロンドン・パテント 6連発
フィスト・ピistol(本箱と付属品付)



全長 135mm
口径 7mm
装弾数 6発

Irish Percussion Duelling Pistol by Fowler, Dublin

アイルランド・ダブリンのThomas Fowler社が1820年代から1830年代頃に製造した、晋打式(パーカッション式)の単発拳銃です。本品は形状や各部の仕様から、二挺一組で用いられる「デュエリング・ピストル(Duelling Pistol; 決闘用拳銃)」と見られます。トリガーガードの後方下部には、握り易さを高める突起が設けられており、これは決闘用拳銃に見られる特徴の一つとされています。銃身は、ダマスカス模様の入った重厚なオクタゴン(八角形)銃身で、スモース・ボア(滑腔銃身)の大口径仕様となっています。本品のパーカッション・ニップル基部(ボルスター)は、ねじ込み式の大型の蓋を備えた非常に珍しい仕様となっています。



銃身基部には、メーカー名と所在地を示す「THOMAS FOWLER DUBLIN」の文字が浮き彫りで刻まれており、その上から金剛金が施されています。



Irish Percussion Duelling Pistol
by Fowler, Dublin
アイルランド・ダブリン
Fowler社製
晋打式単発拳銃



全長 398mm
口径 12.5mm
装弾数 単発

French LeMat Revolver, 2nd Model Early Production

ル・マトリボルバーは、米国ニューオーリンズの医師ジャン・アレクサンドル・ル・マット(1821-1895)により発明された回転式拳銃です。本銃の米国特許は1856年に取得されましたが、米国南部では量産できず、主にベルギー・リエージュやフランス・パリで生産が行われました。本銃は拳銃弾と散弾を撃ち分けられる構造を持ち、9連発のシリンダー中央に散弾銃身を備えています。撃針の切り替えで弾種を選択でき、当時としては極めて高い火力を有していました。南北戦争中には、主に南軍将校の間で広く使用され、推定で約900挺が陸軍、600挺が海軍で使用されたとされています。これらは英国経由で南部に輸入されましたが、戦争終結とともに量産は中止されました。



ハンマー先端の撃針を downward に切り替える事で、散弾発射用のパーカッション・ニップルを撃発する事が可能になります。



French LeMat Revolver
2nd Model, Early Production
フランス・ル・マトリボルバー
2nd Model 初期型



全長 332mm
口径 10.5mm 16GA
装弾数 9発+1発

French Noël's 10-shot Pocket Turret Revolver

1865年にフランスのセバスチャン・アメデー・エル大尉(Sébastien Amédée Noël)によって考案された、ターレット・リボルバーと呼ばれるタイプの銃です。本銃の弾薬装填部はシリンダー外周に配置され、シリンダーの回転軸は銃身に対して90度傾向きに配置されています。撃発にはベレット・プライマーを使用し、シリンダー軸の周囲にはプライマーを装填する為の窪みが設けられています。本体右側面には薄い板状のハンマーを備えており、撃針が本体右側面に設けられた穴を通してシリンダー内のプライマーを撃発します。本銃は、当時既に存在したシステムの拳銃が数多く登場していた事から、商業的には成功せず、約500挺程度が製造されるにとどまったと言われています。



本体左側面にはヒンジにより開閉する蓋が設けられており、これを開く事でシリンダーを容易に取り出し、弾薬及びプライマーの装填を行う事が可能です。



French Noël's 10-shot
Pocket Turret Revolver
フランス / ノエル 10連発
ターレット リボルバー



全長 230mm
口径 7mm
装弾数 10発

French Chassepot M1866 Infantry Rifle, 1st Model

1866年にフランス軍が制式採用した、ニードル・ファイア式のボルト・アクション・ライフルです。同時期にプロイセン軍が採用していたドライゼ小銃は、薬室の閉鎖強度が低かったため、前装銃よりも個装の弾薬を使用せざるを得ず、射程距離が短いという欠点がありました。一方、シャスボー小銃は、発射時の圧力によってボルトヘッド後方のゴム製の塞環(リング)が押し潰されて膨張し、薬室の内壁に密着する構造を採用しており、発射時のガス漏れを防いでいました。発射後、ボルト・ヘッドにかかる圧力が低下すると、塞環は元の形状に戻り、薬室との密着が解かれます。膨張と収縮を繰り返す塞環は消耗品であり、兵士は予備の塞環数個と、破損し易い針状の撃針を携帯していました。

French Chassepot M1866
Infantry Rifle, 1st Model
フランス シャスボー Mle 1866 歩兵銃 1型



1869年まで製造された1型には、コッキング・ピース後部に大きな切れ込みがあり、さらに1868年まではボルト・ハンダの後部にチャッキングが施されていました。



全長 1,310mm
口径 11mm
装弾数 単発

Belgian Victor Collette Gravity Feeding Pistol

1853年にベルギーのヴィクトル・コレットが特許を取得した「グラビティ・フィーディング・システム」を採用した、特殊な装填機構を持つ珍しい拳銃です。銃身上部の管状弾倉にロケット・ボール弾を装填し、銃口を上方に向けてハンマーをハーフ・コック位置まで起こすと、プリーチ・ブロックが管状弾倉の後方まで上昇します。弾薬は重力によりプリーチ・ブロックの手前まで押し下げられ、管状弾倉の後部に設けられた爪状の部品を用いて一発ずつ薬室に送り込まれます。その後、ハンマーをフル・コック位置まで起こすと、プリーチ・ブロックが下降し、撃発準備が整います。この方式は1855年のパリ万博にも出品されましたが、弾薬の威力が低く実用性に乏しかったため、普及しませんでした。



国内に現存するヴィクトル・コレット・パテント・グラビティ・フィーディングピストルには、全て「明治」と4桁の連番、そして「若森」の刻印が打刻されています。



Belgian Victor Collette Gravity Feeding Pistol
ベルギー ヴィクトル・コレット・パテント
グラビティ・フィーディングピストル



全長 343mm
口径 11.5mm
装弾数 20発

Belgian Lefauchaux 30-shot Pinfire Revolver

フランスやベルギーでは、連発銃の黎明期であった1850年代から1870年代にかけて、ルフォーショール・リボルバーの装弾数を極限まで増やす為の工夫が重ねられました。本品はその代表例で、銃身を上下に2本並べた構造を持ち、驚異的な30連発を実現しています。シリンドラーの薬室は、外側(20発)と内側(10発)に二重に配されており、上側の銃身は外側の薬室の弾を、下側の銃身は内側の薬室の弾を、それぞれ発射します。一般的に、二重構造のシリンドラーを備えたルフォーショール・リボルバーのハンマーには、外側用と内側用の2本の撃針が設けられていますが、本品は1本の撃針のみで両方の薬室を発射します。本品は特注品で、銃全体に金鍍金が施され、象牙製グリップが装着されています。



ハンマーの撃針は、シリンドラーの薬室の位置に応じて自動的に上下にスライドし、外側と内側の薬室を撃ち分ける構造となっています。



Belgian Lefauchaux 30-shot Pinfire Revolver
ベルギー ルフォーショール
30連発 リボルバー

全長 252mm
口径 8mm
装弾数 30発

Belgian Lefauchaux Presentation Model Revolver by Rocour

ベルギー・リエージュのRocour社が製造した、ルフォーショ・タイプのリボルバーです。金属部には、アル・デコ様式を想起させる幾何学的なモチーフが組線象嵌で表現され、その中に金象嵌で西洋風の装飾があらわれています。銃身上部は、銃口からフレーム後方上部まで繋がったバレル・ラグのような形状となっており、その後端がフレームに2本のネジで固定された特殊な構造を採用しています。銃身上部には、アルゼンチン・ブエノスアイレスの高級銃器店「E. PARIS」社により販売された事を示す「E. PARIS CALLE RIVADAVIA BUENOS-AYRES」の文字が金象嵌により施されています。同店は富裕層向けに銃器、弾薬、ナイフ等を販売していました。



銃身上部に販売店名を示す「E. PARIS CALLE RIVADAVIA BUENOS-AYRES」の文字が金象嵌により入っています。



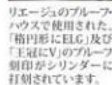
Belgian Lefauchaux Presentation Model Revolver by Rocour
ベルギー Rocour社製 ルフォーショ・プレゼンテーションリボルバー



全長 296mm
口径 12mm
装弾数 6発

Belgian Lefauchaux Pinfire Revolver w/ Folding Knife

銃身下部に折り畳み式の短剣ユニットを装着した、特殊なルフォーショ・リボルバーです。この折り畳み式短剣ユニットは、1865年にベルギーのBayet Frères社が特許を取得したもので、銃身下面に取り付けられた板状の基部に対して蝶番を介して短剣が展開・収納されます。短剣基部には板バネ式のロックが設けられており、短剣展開時には自動的にロックが掛かります。Bayet Frères社は、リエージュのブルーフ・ハウスに1860年から1881年まで登録されていた銃器製造業者で、1865年から1873年の間に銃器に関する6件の特許を取得しており、本システムの他にも、グリップが回転して開く機構や、バネを使用しない管打式機構といった特殊な構造に関する特許を保有していました。



リエージュのブルーフ・ハウスで使われた「格闘形にELC」及び「王冠にV」のブルーフ・剣印がシリンダーに打刻されています。

Belgian Lefauchaux Pinfire Revolver w/ Folding Knife

ベルギー Bayet Frères社製
ルフォーショ・リボルバー (折り畳み式短剣付)



全長 281mm
口径 10mm
装弾数 6発

様々なイベントにも
出店しています!

Chicago Regimentals

シカゴレジメンタルズ 無可動実銃

お手にとって心ゆくまで無可動実銃をご堪能いただけます。写真撮影可ですのでSNS映える一枚を撮ってみてはいかがでしょうか。



Chicago Regimentals

シカゴレジメンタルズ 古式銃

しかが堂

Chicago-do

日本古式銃専門店

要予約のシカゴギャラリーに展示されている古式銃やしかが堂の商品を出品します。しかが堂店主が番販をしているので、直接話ができるのも魅力です。



シカゴ社長の 個人的なお店

宮崎商店

店舗では通常は販売しないトイガン、軍装品などを販売します。処分品のためマーケット・プライスを無視した価格設定で大好評を頂いております。



■ 2025年の出店・予定

今年も全国各地のイベントに出店致します。普段、通販をご利用のお客様と実際にお会いできるのがイベントの楽しみの一つです。今年は更に新しいイベントにも出店します!

※上記イベントの開催及び出展内容は、予告なく変更する場合がありますのでご了承ください。

【マークの見方】

- 無可動実銃
- 古式銃&しかが堂
- 宮崎商店

7/6(日)

札幌 S.G.G.M
(Survival Game
Gear's Market)
【札幌】

出店

4/20(日)

東北サバゲ魂
【郡山】

出店

10/4(土)

#ガンフェス【練馬】

出店

1/25(土)・26(日)、
6/1(日)、9/28(日)

ビクトリーショー 東京
【浜松町】

出店

11/1(土)・2(日)

大刀剣市【新橋】

出店

2/8(土)・9(日)

九州ミリサバ
展示即売会
【久留米】

出店

5/24(土)・25(日)、12/6(土)・7(日)

ショットショー・ジャパン 春の部・冬の部
【大阪】

出店

X シカゴレジメンタルズ公式エクス フォローお願いします!

シカゴスタッフが様々な情報やお知らせなどを毎日ポストしています。最新情報は是非チェックしてみてください!



CHICAGO BLOG

シカゴレジメンタルズ公式 Blog
ご好評いただいています!

銃やアクセサリなどを掘り下げて細部までご紹介しています。過去 Blog も仕入れ裏話や資料性の高い記事が多くお楽しみいただけます!



シカゴレジメンタルズ
買取りシステム **3ステップ****1**
ステップ

まずは弊社までお電話ください。

03-5818-1123

弊社よりお買い上げいただいた品は、状態が販売時と同じであれば販売価格の最低40%を保証します。

宅配便での送品、お持ち込みどちらでもOKです。
梱包材料の無い方には専用段ボール箱をお送りします。**2**
ステップ

査定をさせていただきます。

今まで弊社で査定した品はほぼ100%の商談が成立しています。それだけ弊社の査定にはご満足いただいております。

※査定額の有効期限は1ヶ月です。

**3**
ステップ買取・下取前提の査定は無料です。
お気軽にお電話ください。ご指定の銀行口座に
即日、お振込します。大量にある場合は、
全国どこでも
出張買取りに伺います！

◇買取りについて◇

1. 弊社よりお買い上げいただいた無可動実銃は、状態が販売時と同様であれば無条件で販売価格(税抜価格)の最低40%を保証し、最高200%以上で買取りいたします。買取り価格は、種類や市場相場によって変わりますが、最近では平均50%程度です。お電話、メールでの大まかな査定も出来ます。お気軽にお問い合わせください。
2. 他店から購入された品であっても、正規輸入品であれば買取り可能です。他店からの購入品は現物を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束もしくは保証するものではありませんのでご了承ください。その際は購入店名(輸入業者名)をお知らせください。
3. アクセサリー、軍服品、書籍のみの場合は買取りが出来ない場合もございますので、事前にお問い合わせください。
4. 正式査定には品を宅配便でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。梱包材料がお手元が無い方には専用段ボール箱を無料でお送りいたします。尚、査定品を弊社までお送りいただく際の送料はご負担いただきますが、買取り成立時に査定額と併せて送料を送金いたします。※買取り不成立時には送料の返金は行われません。
5. 査定の有効期限は1ヶ月です。
6. 買取りが成立した後(代金の振込み後)のキャンセルは出来ません。ご了承ください。

◇下取りについて◇

1. 下取りの条件は基本的に買取りと全く同様ですが、査定を買取り価格よりも10%高く評価させていただきます。ご購入予定の品によってはさらに高く評価出来る事もありますので、ご相談ください。
2. 下取り品の代わりに購入される品が下取り品の価格より低い場合の査定は、買取り価格と同等となります。
3. 下取り品の代わりに購入される品の返品は、弊社規定の返品期間内であれば他の品との交換は可能です。但し、返品してキャンセルになった場合の査定額は買取り価格と同等となります。

買取り・下取りの際は身分証明書のコピーをいただきます。ご来店の際は、必ず身分証明書(運転免許証、マイナンバーカード、パスポート等)をご持参ください。宅配/郵送にて商品をお送りいただく場合は、身分証明書のコピーと買取り代金の振込口座情報(名義人、銀行名、支店名、口座の種類、口座番号)を明記のうえ同封してください。

買取保証

40%

買取り価格は販売価格の最低40%を保証!^{※2※3}

国内唯一の専門店が当社の強み!!

買取・下取

購入店で売るのが楽!!

下取保証

50%

下取り価格は販売価格の最低50%を保証!^{※2※3}

※1 銃物刀剣類登録付古式銃については、査定方法が異なるため、上記の買取り/下取り保証の対象外となります。

※2 弊社よりお買い上げいただいた無可動実銃の状態が販売時と同様であれば、無条件で上記の保証%以上で買取り/下取り保証いたします。詳しくは本誌P.103をご覧ください。

※3 販売価格は税抜価格での計算となります。

古式銃の買取/下取りのご案内

◇まずはご確認ください◇

各都道府県の教育委員会が発行した「銃砲刀剣類登録証」が付いた合法的に所持ができる古式銃のみを買取り致します。

「銃砲刀剣類登録証」を紛失された方は「再交付」、新しく発見された古式銃については「発見届」から「登録審査」までのアドバイスを致します。「銃砲刀剣類登録証」が交付されてから弊社で買取を行います。※「再交付」もしくは「登録」の保証をするものではありません。

*「銃砲刀剣類登録証」がない古式銃(例えどのように古いタイプの銃であっても)の買取はできません。明治以降の品(真正拳銃に該当する物)につきましては、古くても古式銃とは見なされません。

*すでに「銃砲刀剣類登録証」が付いた古式銃をお持ちの場合は、古式銃現物と登録証の記載内容が一致しているかを必ずご確認ください。

銃砲刀剣類の登録証サンプル



昭和34年交付

昭和48年交付

平成2年交付

◇お問い合わせください◇

買取可能な登録証付き古式銃であれば、お電話またはメールで、銃名(モデル名)、登録証情報、購入金額、購入時期、商品のコンディション(動作するか、欠品がないか)、付属品の有無、買取希望金額をお伝えいただけます。大まかな査定が出来ます。

また、火縄銃の場合はモデル名がないので、写真など査定判断が出来るものをお送りください。

◇査定いたします◇

古式銃の現物と登録証を確認した後に正式な査定となります。お電話での査定額は、それを約束または保証するものではありませんので、ご了承ください。

正式査定には品を宅配便等でお送りいただくか、東京、大阪店へ直接お持ち込みください。

*古式銃の現物と登録証は、必ず一緒にご送付いただくか、またはお持ち込みください。

古式銃の付属品のみのお買取は基本的には出来ませんが、品によっては可能な場合もありますので、お問い合わせください。ただし、銃と一緒に付属品(特にオリジナル木箱など)を買取りに出される場合は、プラス評価をさせていただきます。

これから先の流れにつきましては、前ページの「無可動銃の買取/下取りのご案内」をご参照ください。

ご不明な点がございましたら、東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。



写真の銃はすべて無可動銃です。



2019年4月1日より、弊社にて無可動銃や登録証付き古式銃を1挺お買い上げいただく毎に「ガゼットしおり」を1枚お渡しするキャンペーンが始まりました。(通販のお客様には商品と同梱してお送りいたします)。弊社発行のガゼットしおりに添えてしおりとしてお使いいただくのに最適なサイズで、全18種類ございます。このガゼットしおりを合計10枚集めていただく、弊社商品が20%OFFになる割引券としてお使いいただけます。詳しくは弊社HPメニューの「Bookmark (ガゼットしおり)」をご参照ください。なお、ガゼットしおりを5枚集めると弊社商品が10%OFFになる期間限定キャンペーンも不定期で実施予定です。(実施決定時には弊社ブログにて告知させていただきます。)

ガゼットしおり割引ご利用時の注意事項

- ・ガゼットしおりの破損・紙裂は無効となります。
- ・※お渡しする際、しおりの種類・枚数・お客様名を控えさせていただきます。
- ・割引サービスは、弊社に氏名・住所をご登録いただいているお客様のみ対象とさせていただきます。なお、割引サービスご利用時有効な住所をご登録いただけない場合は、割引サービスの適用対象外となります。転居等により、弊社に登録されている住所から現住所が変更となっているお客様につきましては、その旨をお申し出ください。
- ・割引サービスのご利用は、弊社がしおりを発行したご本人様のお会計1回のみに限らせていただきます。
- ・割引適用商品はしおりの発行対象外となります。
- ・銃のご購入時に割引サービスをご利用される場合は、1挺にのみ適用されます。また、銃と同時にご購入されるアクセサリにも割引が適用されます。アクセサリは同一会計内であれば個数の範囲内で割引が適用されます。
- ・一部割引適用外の商品もございます。
- ・他の割引サービスとの併用はできません。
- ・複製もしくは改変、書き汚損されたしおりはご利用いただけません。
- ・しおりの配布は、弊社にてしおりの在庫がなくなった時点で終了となります。
- ・有効期限はございません。
- ・クレジットカード及びPayPal、PayPayでのお支払いの場合は、割引サービスは適用されません。
- ・しおりのご利用条件は予告なく変更となる場合がございます。

HP上のガゼットしおりに関するページは下記からご覧いただけます。



無可動実銃について

無可動実銃とは実物の銃に対して発射機能を排除する加工を海外で施し、装飾用として合法的に輸入された品です。
輸入された時期によって多少の違いはありますが、下記の加工は最低限施されているのが無可動実銃の条件です。

- ＊銃身内部に鉄製のインサートが銃口から薬室まで挿入されて蓋がおり溶接によって掛けなくなっていること。
- ＊薬室と銃身にスリットが入っていること。
- ＊薬室は溶接によって蓋がおり溶接は出来ないこと。
- ＊ボルトの一部若しくは半分を除去して使用不可能にし、機関部本体に溶接で固定されていること。
- ＊引き金を除く、トリガー・メカニズムの一部、若しくは全てを取り外していること。
平成10年以降に輸入された品はより厳しい加工が施されており。

古式銃砲について

下記の銃砲刀剣類所持等取締法第十四～十八条(抜粋)に基づき、教育委員会によって「銃砲刀剣類登録証」が交付された古式銃は合法的に所持が認められています。

第十四条 都道府県の教育委員会は、美術品若しくは骨とう品として価値のある火縄式銃砲等の古式銃砲又は美術品として価値のある刀剣類の登録をするものとする。

- 2 銃砲又は刀剣類の所有者(所有者が明らかでない場合にあつては、現に所持する者、以下同じ)で前項の登録を受けようとするものは、文部科学省で定める手続により、その住所の所在する都道府県の教育委員会に登録の申請をしなければならない。
- 3 第一項の登録は、登録審査委員の認定に基づきしなければならない。
- 4 都道府県の教育委員会は、第一項の認定による登録をした場合においては、速やかにその旨を登録を受けた銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。
- 5 第一項の登録の方法、第三項の登録審査委員の任命及び職務、同項の認定の基準及び手続その他登録に関し必要な細目は、文部科学省で定める。

(登録証)

第十五条 都道府県の教育委員会は、前条第一項の登録をする場合においては、登録証を交付しなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を所持する者は、登録証を亡失し、若しくは盗み取られ、又は登録証が滅失した場合においては、文部科学省で定める手続により、速やかにその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出てその再交付を受けなければならない。
- 3 登録証の様式及び再交付の手続は、文部科学省で定める。

(登録を受けた銃砲又は刀剣類の譲受け、相続、貸付け又は保管の委託の届出等)

第十七条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、又は相続により取得し、又はこれらの貸付け若しくは保管の委託をした者は、文部科学省で定める手続により、二十日以内にその旨を当該登録の事務を行った都道府県の教育委員会に届け出なければならない。貸付け又は保管の委託をした当該銃砲又は刀剣類の返還を受けた場合においても、また同様とする。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を試験、研究、研習若しくは修理のため、又は公衆の観覧に供するため貸し付け、又は保管の委託をした場合においては、前項の規定にかかわらず、届出を要しない。
- 3 都道府県の教育委員会は、第一項の届出を受理した場合においては、速やかにその旨を当該届出に係る銃砲又は刀剣類の所有者の住所を管轄する都道府県公安委員会に通知しなければならない。

第十八条 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り渡し、貸し付け、若しくはこれらの保管を委託し、又はこれらを他人をして運送させる者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。

- 2 登録を受けた銃砲又は刀剣類を譲り受け、借り受け、又はこれらの保管の委託を受ける者は、当該銃砲又は刀剣類の登録証とともにしなければならない。
- 3 何人も、当該銃砲又は刀剣類とともにする場合を除いては、登録証を譲り渡し、又は譲り受けてはならない。

ご来店のお客様へ

＊弊社は世界で最も多種の小火器を展示販売している、無可動実銃と古式銃の専門店です。一般的な品は数多くの中からお選びいただけるように、一種類につき数個ずつ在庫を用意していますので、ぜひお来店いただき、ご自身の目でお確かめください。希少価値の高い品につきましては一品物もございますので、遠方よりご来店の際は予めお電話もしくはメールで在庫状況をご確認ください。

＊東京上野本店、大阪店ともに年中無休です。(お正月休みを除く)

営業時間は 東京店 12:00～19:30 / 大阪店 12:00～20:00 です。

＊各種クレジットカード(VISA、Mastercard、JCBとその提携カード(Amex、Dinersなど)、Nicos、Orico)を取り扱っています。(分割2回、ボーナス払いはご利用いただけません。)

＊オリエントコーポレーションの店頭即決ローン(Oricoローン)も取り扱っております。ローンをご希望の方は口座番号、銀行印と身分証明書(運転免許証、マイナンバーカード等)をお持ちください。

＊重機関税をお買い求めのお客様で簡易包装でのお持ち帰りをご希望される方には、販売価格より1万円サービスさせていただきます。(プロニング M1919 A4機関銃など、対象外の品もありますので、お会計の前にご確認ください。)

通信販売をご利用のお客様へ

- ①お電話(TEL: 03-5818-1123)、またはメール(chicago@regimentals.jp)にてご注文を承っております。
- ②弊社HPからのご注文も承っております。まずはご希望の商品ページにある「ご注文受付はこちら」から「ご注文フォーム」をご送信ください。
シカゴレジメンタルズ <http://www.regimentals.jp>
- ③ご注文受付後、在庫を確認した上で折り返し弊社よりご連絡致します。尚、無可動実銃と古式銃の送料は弊社でサービスさせていただきます。
- ④お支払い方法は下記の通りです。ご注文または入金いただいた場合は、確認の為に必ずお電話またはメールにて東京上野本店まで早急にお知らせください。
(送金業務を円滑にするために事務を防ぐために更に宜しくお願い致します。)
- ⑤ご注文いただいた品が店頭在庫とある場合は、ご送金・ご入金確認後、または決済完了後に宅配にて発送致します。

◆銀行送金の場合

三井住友銀行 江坂支店 普通口座 296764 名義人 株式会社シカゴレジメンタルズ
ゆちょ銀行 記号 10130 番号 87425981 名義人 株式会社シカゴレジメンタルズ

◆クロネコヤマトコレクトサービス(代金引き換え)の場合

14:00 までにご注文を頂ければ一部地域を除き翌日配達が可能です。

※返品の場合は送料の他に代引手数料もご負担いただきますのでご了承ください。

(注)15:00を過ぎて銀行へお振込みいただいた場合、翌日入金となる場合があります。その場合は翌日発送となります。

★通信販売の送料・代引手数料について

＊ご購入金額が3万円(税込)以上の場合は、送料・手数料ともにサービスさせていただきます。

＊ご購入金額が3万円(税込)未満の場合は、1,000円の送料をご負担いただいております。

また、コレクトサービス(代金引き換え)の場合は、
送料1,000円+代引手数料500円=合計1,500円をご負担ください。

◆クレジットカードでお支払いの場合

在庫確認後にお送りするクレジットカード決済用メールの内容をご確認の上、決済手続きをお願いします。

◆PayPalでお支払いの場合

在庫確認後にお送りするPayPal決済用メールの内容をご確認の上、PayPal決済手続きをお願いします。

◆Oricoローンをご利用の場合

通信販売でもOricoローンをご利用いただけます。簡単な手続きで分割払いが可能です。また金利もクレジットカードより低くお得です。(分割回数は、webオリコが3回～60回、専用用紙記入によるお申し込みが6回～60回となります。)

◆現金書留の場合

〒110-0005 東京都台東区上野1-12-7 (The シカゴビル)
株式会社シカゴレジメンタルズ TEL: 03-5818-1123

※弊社取り扱いの商品は書籍とスヌープを除き全て返品が可能ですので、通信販売でも安心してお買い求めいただけます。もし商品にご満足いただけない場合は、商品を受け取ってから7日以内にご連絡の上、ご返送ください。お送りいただいた金額より送料、各種手数料(代引き手数料・振込手数料など)を差し引いた金額を返金致します。(但し、古い品ですので返品は常識的な回数でお願い致します。)

●ご不明な点がありましたら東京上野本店までお気軽にお問い合わせください。